

南海トラフ地震関連解説情報について

－最近の南海トラフ周辺の地殻活動－

現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時^(注)と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

(注) 南海トラフ沿いの大規模地震(M8からM9クラス)は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率が高い(詳細は「南海トラフの地震活動の長期評価(第二版一部改訂)」参照)と評価されており、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約80年が経過していることから切迫性の高い状態です。

1. 地震の観測状況

(顕著な地震活動に関する現象)

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

(ゆっくりすべりに関係する現象)

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震(微動)のうち、主なものは以下のとおりです。

- (1) 四国中部：6月7日から6月23日
- (2) 紀伊半島北部：6月11日から6月17日
- (3) 東海：6月25日から6月26日

2. 地殻変動の観測状況

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)から(3)の深部低周波地震(微動)とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られました。

GNSS観測によると、2022年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。

(長期的な地殻変動)

GNSS観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

3. 地殻活動の評価

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)から(3)の深部低周波地震(微動)と地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

2022年初頭からの静岡県西部から愛知県東部にかけての地殻変動は、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけてのプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。この長期的ゆっくりすべりは、すべりの中心が渥美半島周辺から、浜名湖の東側に移動しています。

これらの深部低周波地震(微動)、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

(長期的な地殻変動)

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

以上を内容とする「南海トラフ地震関連解説情報」を本日17時00分に発表しました。

添付の説明資料は、気象庁、国土地理院、防災科学技術研究所及び産業技術総合研究所の資料から作成。
気象庁の資料には、防災科学技術研究所、産業技術総合研究所、東京大学、名古屋大学等のデータも使用。
産業技術総合研究所の資料には、防災科学技術研究所及び気象庁のデータも使用。

気象庁では、大規模地震の切迫性が高いと指摘されている南海トラフ周辺の地震活動や地殻変動等の状況を定期的に評価するため、南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会を毎月開催しています。本資料は本日開催した評価検討会で評価した、主に前回(令和8年6月5日)以降の調査結果を取りまとめたものです。

なお、日時のデータなど、精査後修正することがあります。

問合せ先：地震火山部 地震火山技術・調査課 大規模地震調査室 担当 上野
電話 03-6758-3900 (内線 5244)

令和8年6月1日～令和8年7月5日の主な地震活動

○南海トラフ巨大地震の想定震源域およびその周辺の地震活動：

【最大震度3以上を観測した地震もしくはM3.5以上の地震及びその他の主な地震】

月/日	時:分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	発生場所
6/3	04:05	三重県南東沖	33	4.0	2	フィリピン海プレート内部
6/6	10:20	愛知県西部	40	4.0	2	フィリピン海プレート内部
6/10	18:01	奈良県	50	3.6	2	フィリピン海プレート内部
6/26	22:28	山梨県東部・富士五湖	20	5.6	6弱	
6/30	10:29	紀伊水道	43	3.8	2	フィリピン海プレート内部
7/1	08:40	宮崎県北部平野部	14	5.1	4	地殻内
7/2	20:13	遠州灘	32	3.6	2	フィリピン海プレート内部

※震源の深さは、精度がやや劣るものは表記していない。

※発生場所は、フィリピン海プレートの中で発生した地震のうち、沈み込むプレートの内部で発生したものは「フィリピン海プレート内部」、それ以外は「フィリピン海プレート内」と表記している。

※太平洋プレートの沈み込みに伴う震源が深い地震は除く。

○深部低周波地震（微動）活動期間

四国	紀伊半島	東海
■四国東部 5月9日～6月2日 6月8日 6月10日～14日 6月16日～19日 6月21日 7月5日～（継続中） ■四国中部 <u>6月7日～23日</u> ^{注1)} . . . (1) 6月27日～30日 ■四国西部 5月27日～6月2日 6月4日～7日 6月9日 6月11日～18日 6月21日～22日 6月24日～30日	■紀伊半島北部 <u>6月12日～16日</u> ^{注2)} . . . (2) 6月22日～25日 ■紀伊半島中部 6月14日～17日 6月22日 ■紀伊半島西部 6月19日～20日 6月22日～23日	6月6日 <u>6月25日～26日</u> . . . (3)

※深部低周波地震（微動）活動は、気象庁一元化震源を用い、地域ごとの一連の活動（継続日数2日以上または活動日数1日の場合で複数個検知したもの）について、活動した場所ごとに記載している。

※ひずみ変化と同期して観測された深部低周波地震（微動）活動を赤字で示す。

※上の表中（1）、（2）、（3）を付した活動は、今期間、主な深部低周波地震（微動）活動として取り上げたもの。

注1） 防災科学技術研究所による解析では、6月8日から17日頃にかけて微動活動が見られた。

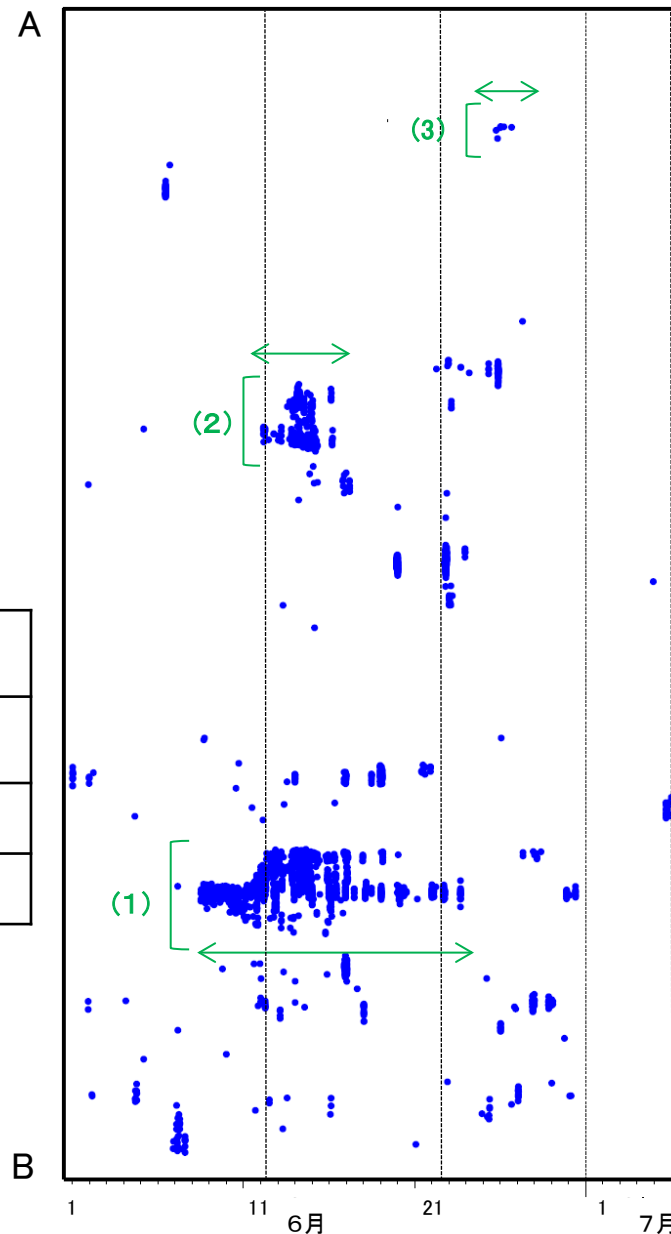
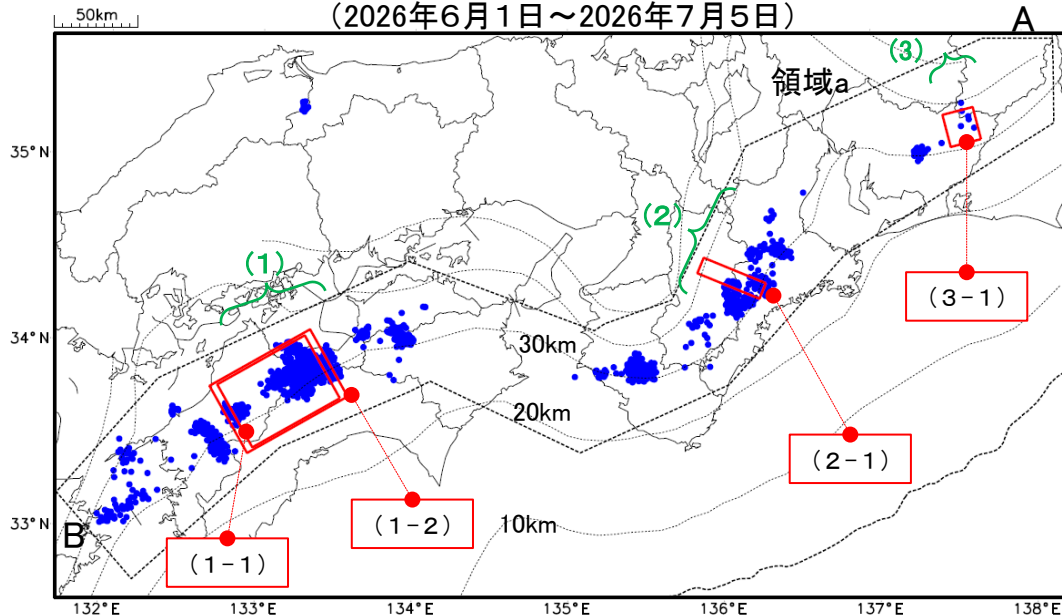
注2） 防災科学技術研究所による解析では、6月11日から17日頃にかけて微動活動が見られた。

深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべりの全体概要

深部低周波地震(微動)の震央分布図と短期的ゆっくりすべりの断層モデル

(2026年6月1日～2026年7月5日)

領域a(点線矩形)内の深部低周波地震(微動)の時空間分布図(A-B投影)



主な深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

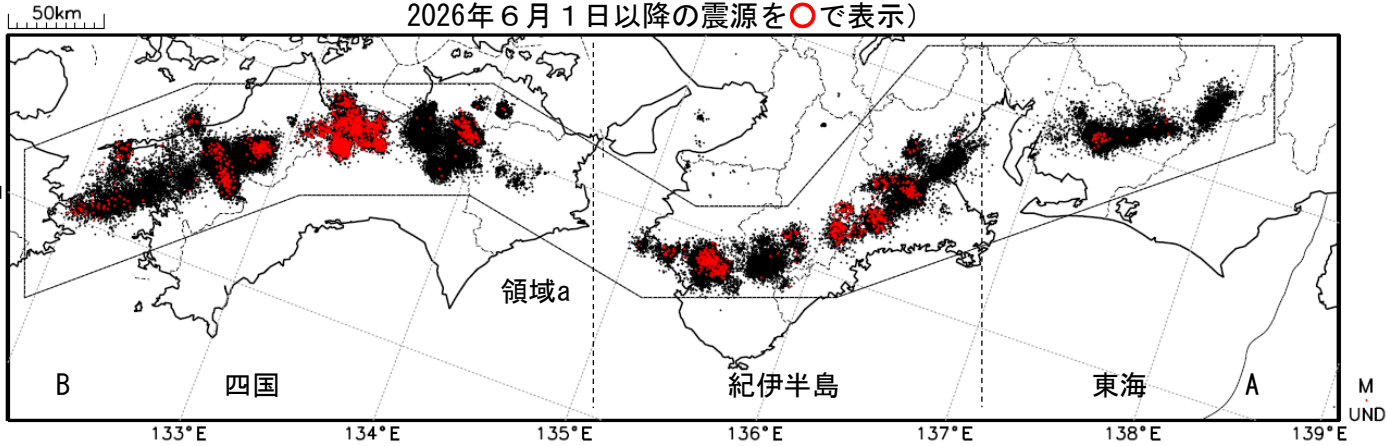
活動場所		深部低周波地震(微動)活動の期間	短期的ゆっくりすべりの期間と規模
(1)	四国中部	6月7日～23日	(1-1) 6月10日00時～14日24時 : Mw6.0 (1-2) 6月15日00時～17日24時 : Mw5.8
(2)	紀伊半島北部	6月11日～17日	(2-1) 6月13日12時～15日12時 : Mw5.7
(3)	東海	6月25日～26日	(3-1) 6月24日00時～27日24時 : Mw5.4

●: 深部低周波地震(微動)の震央(気象庁の解析結果を示す) 期間(気象庁及び防災科学技術研究所の解析結果を示す)
 □: 短期的ゆっくりすべりの断層モデル(東海(3-1): 気象庁の解析結果を示す。
 四国中部(1-1)～(1-2)、紀伊半島北部(2-1): 産業技術総合研究所の解析結果を示す。
 点線は、Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)によるフィリピン海プレート上面の深さ(10kmごとの等深線)を示す。

深部低周波地震（微動）活動（2016年7月1日～2026年6月30日）

深部低周波地震（微動）は、「短期的ゆっくりすべり」に密接に関連する現象とみられており、プレート境界の状態の変化を監視するために、その活動を監視している。

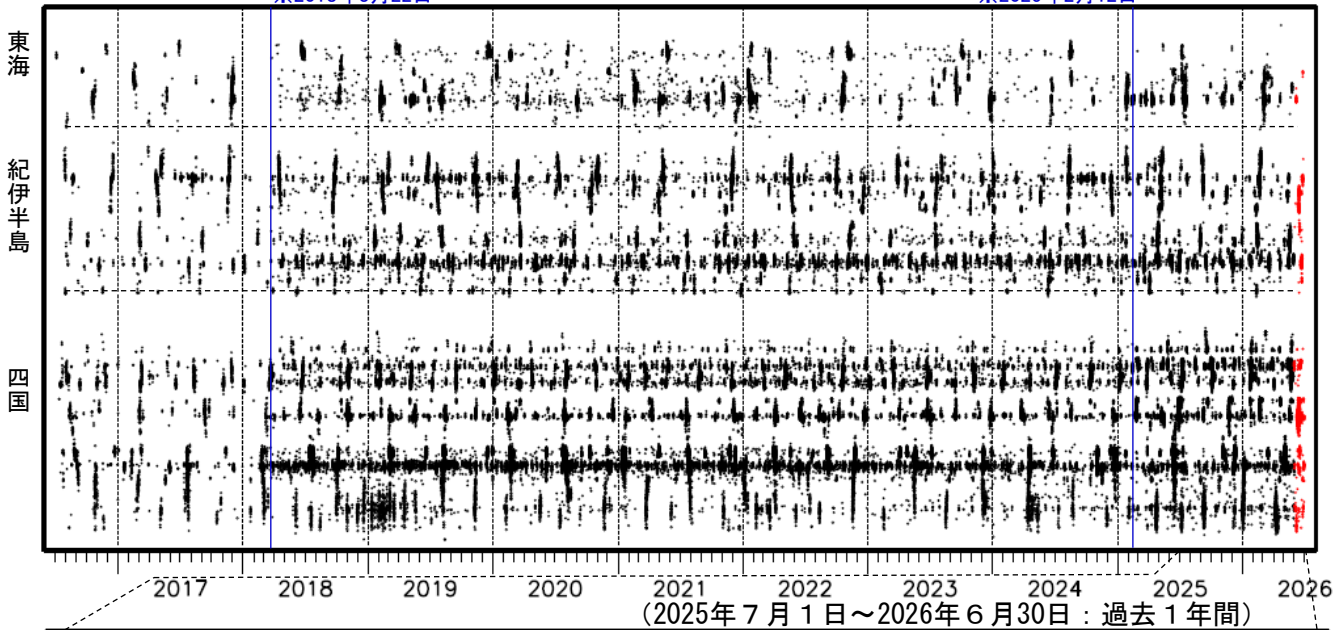
震央分布図（2016年7月1日～2026年6月30日：過去10年間
2026年6月1日以降の震源を○で表示）



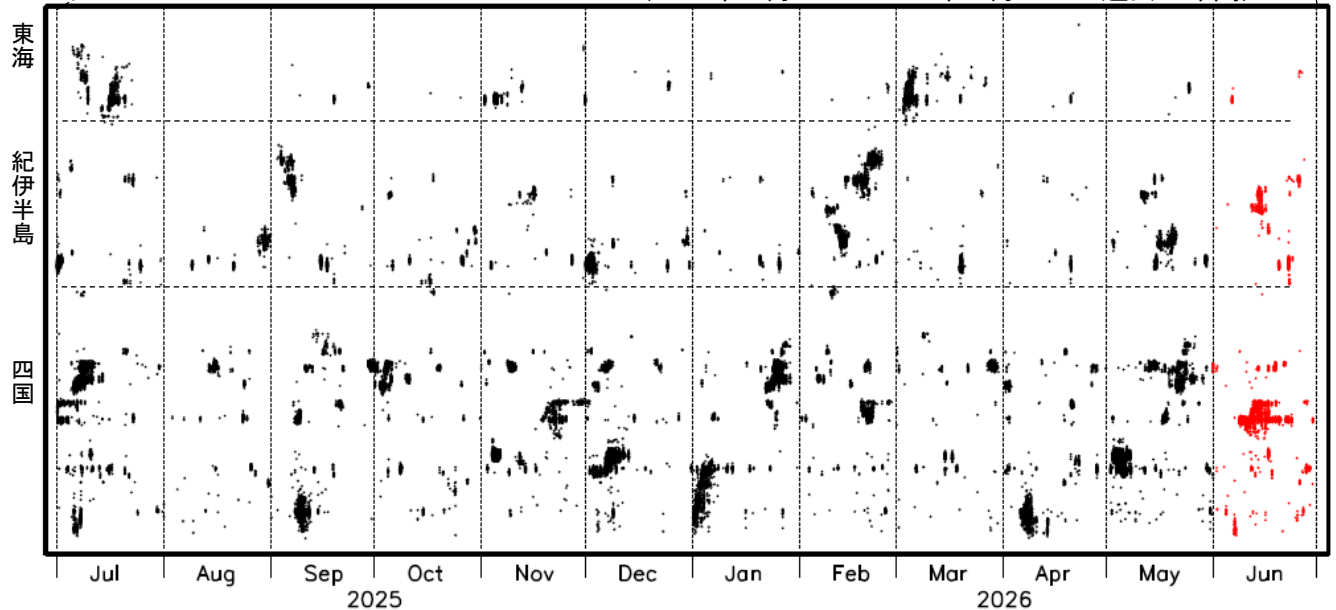
上図領域a内の時空間分布図（A-B投影）

※2018年3月22日

※2025年2月12日



(2025年7月1日～2026年6月30日：過去1年間)



※2018年3月22日、および、2025年2月12日から、深部低周波地震（微動）の検知手法の改善により、それ以前と比較して検知能力がそれぞれ変わっている。

紀伊半島・東海地域の深部低周波微動活動状況 (2026年6月)

● 6月11～17日頃に紀伊半島中部において、活発な微動活動。

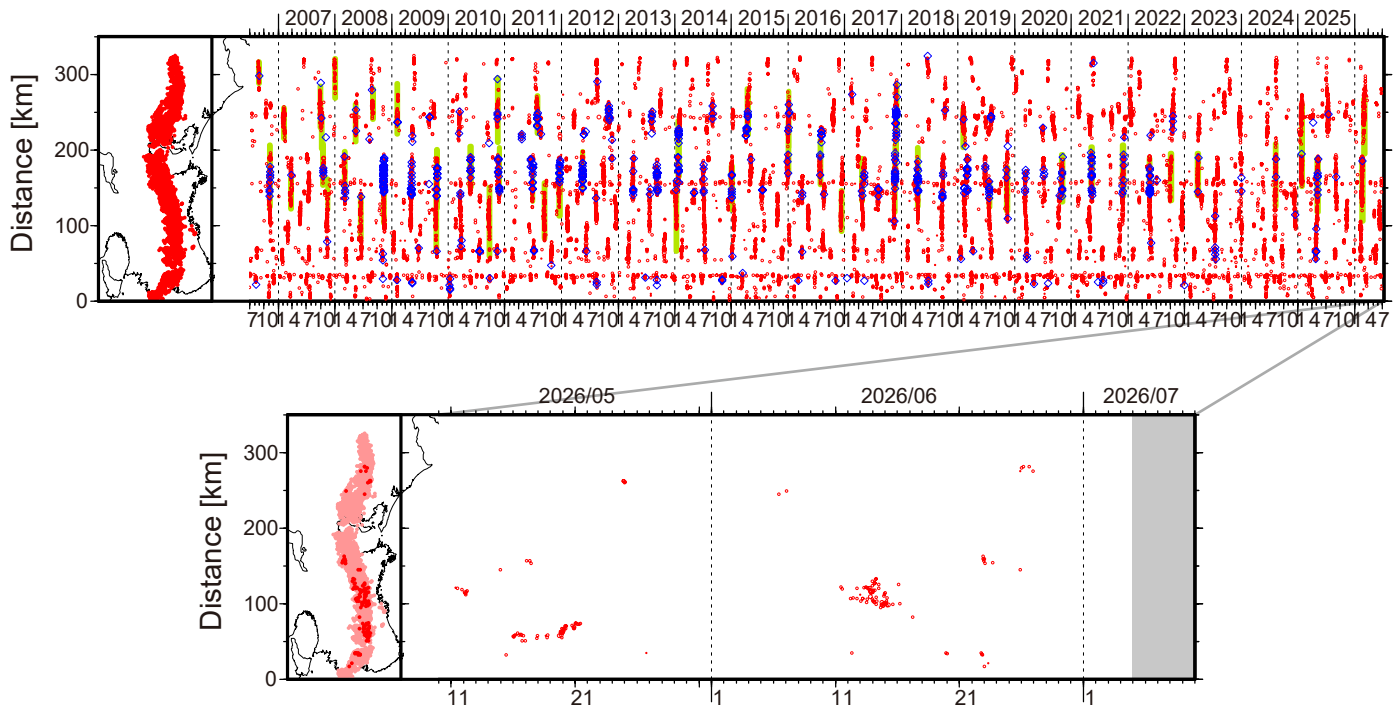


図1. 紀伊半島・東海地域における2006年7月～2026年7月4日までの深部低周波微動の時空間分布(上図). 赤丸はエンベロープ相関・振幅ハイブリッド法 (Maeda and Obara, 2009) およびクラスタ処理 (Obara et al., 2010) によって1時間毎に自動処理された微動分布の重心である. 青菱形は周期20秒に卓越する超低周波地震 (Ito et al., 2007) である. 黄緑色の太線はこれまでに検出された短期的スロースリップイベント (SSE) を示す. 下図は2026年6月を中心とした期間の拡大図である. 6月11～17日頃には奈良・三重県境付近で活発な微動活動がみられた. この活動では、沈み込むプレートの深い側から開始後、浅い側および北東・南西方向への活動域の拡大がややみられた. 6月25～26日頃には、愛知・長野県境付近において小規模な活動がみられた. 6月22～23日頃には三重県北部および和歌山県中部において、それぞれごく小規模な活動がみられた.

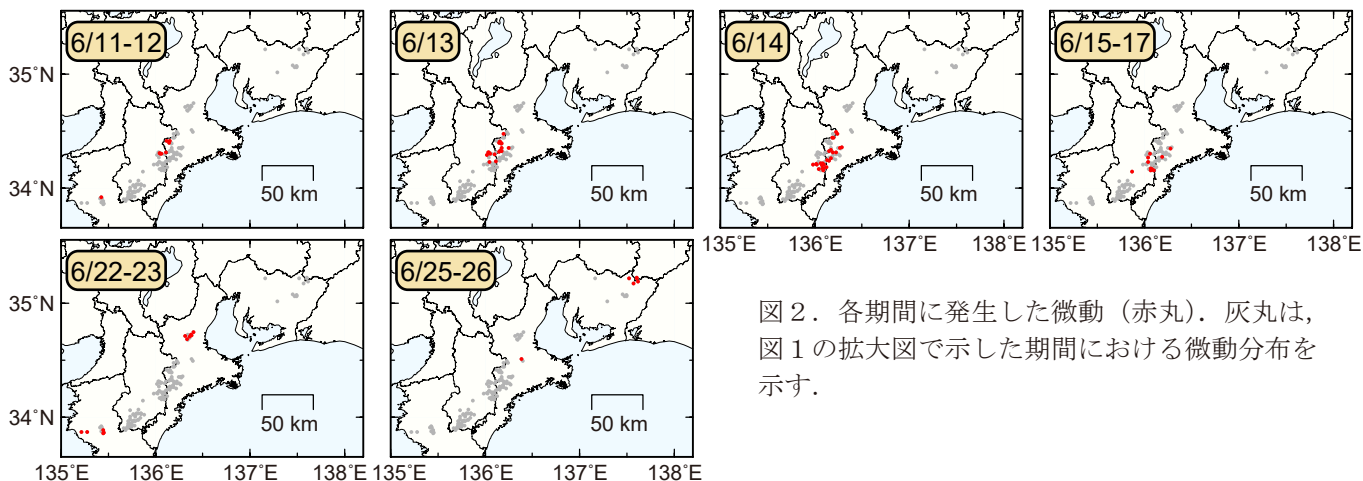


図2. 各期間に発生した微動 (赤丸). 灰丸は、図1の拡大図で示した期間における微動分布を示す.

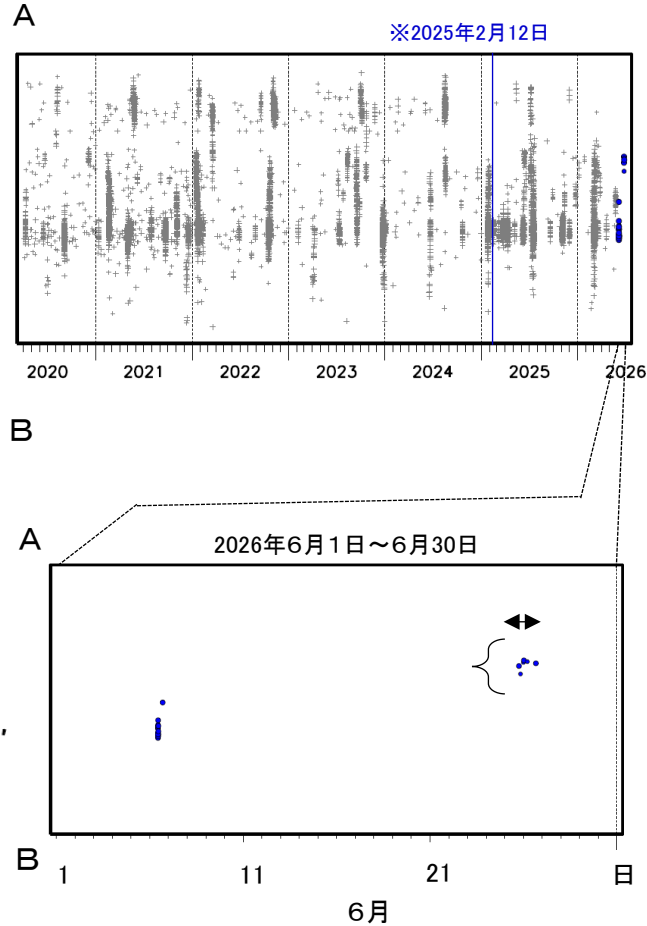
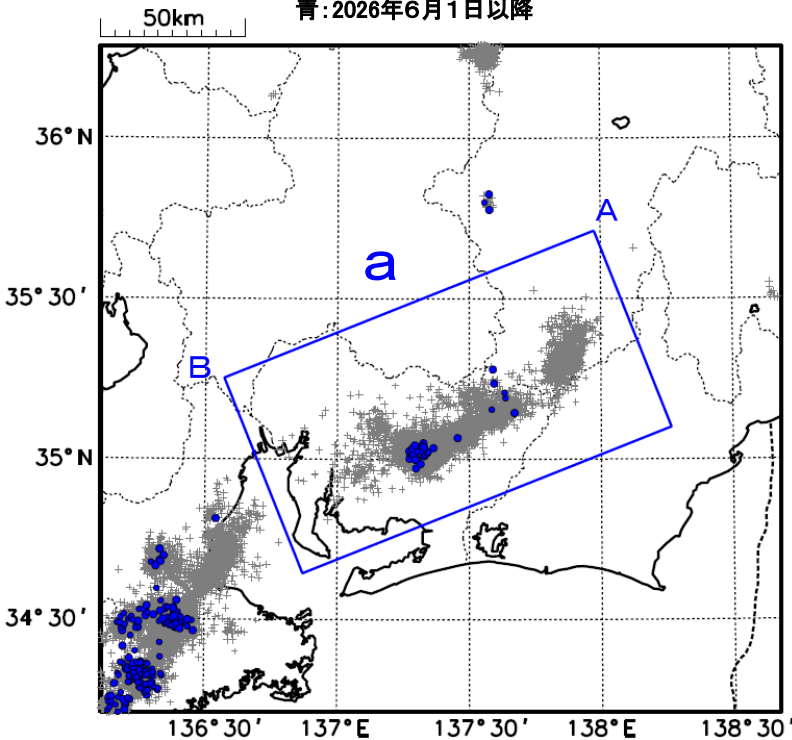
東海の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

6月25日から6月26日にかけて、東海で深部低周波地震(微動)を観測した。
深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2020年4月1日~2026年6月30日、
深さ0~60km、Mすべて)
灰:2020年4月1日~2026年5月31日、
青:2026年6月1日以降

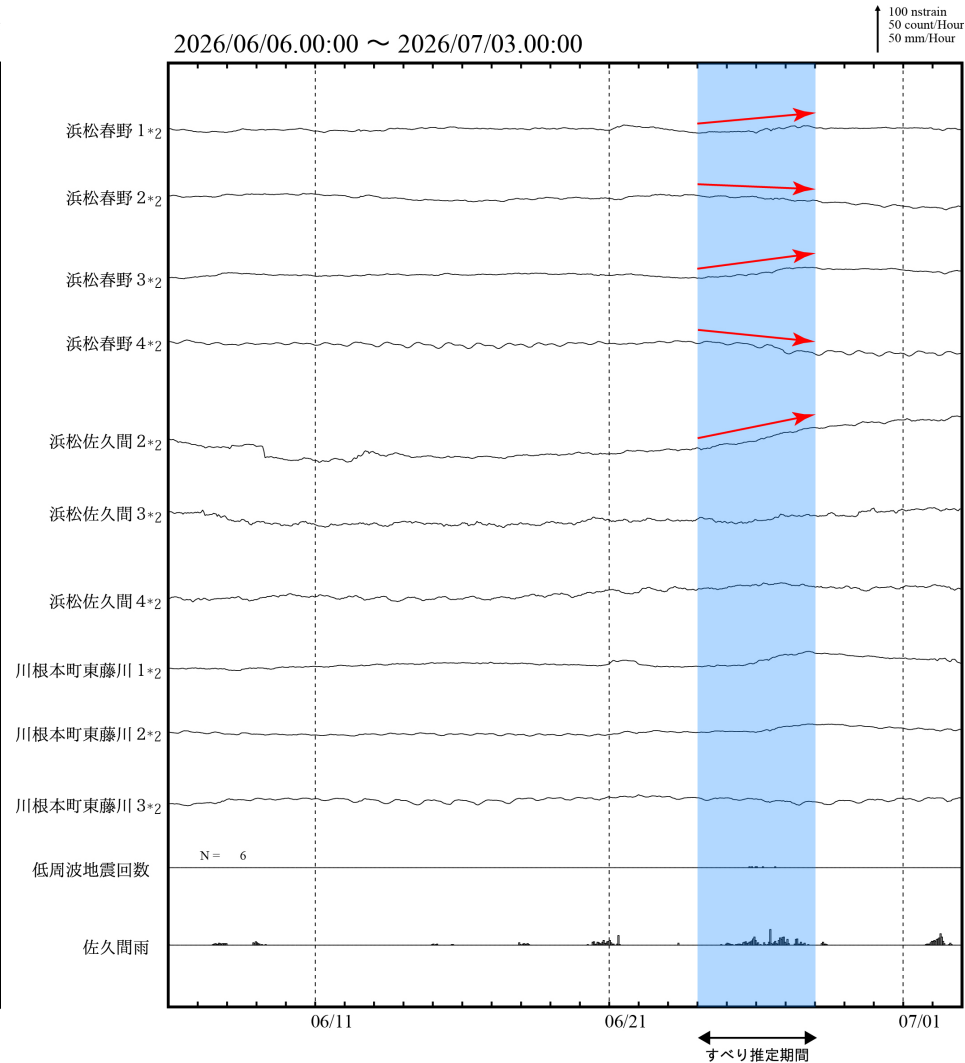
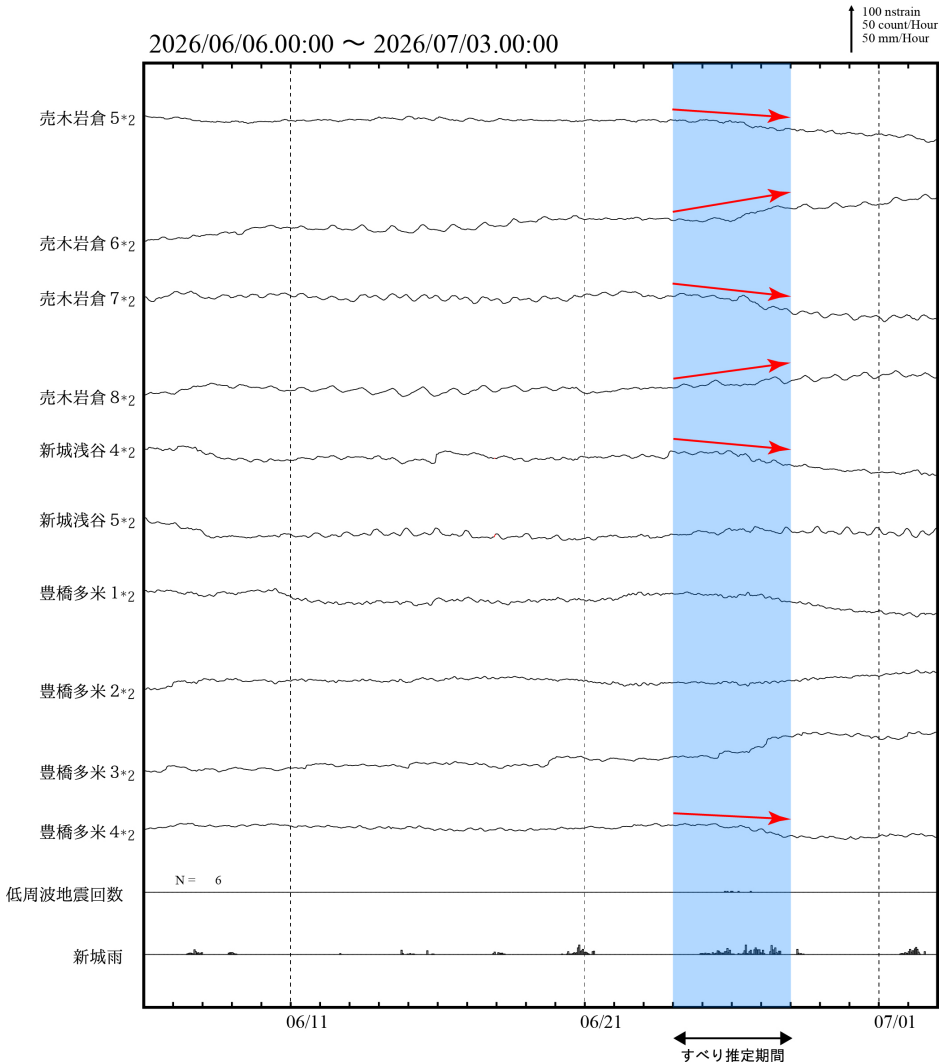
領域a内の時空間分布図(A-B投影)



※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

東海で観測した短期的ゆっくりすべり(6月24日～27日)

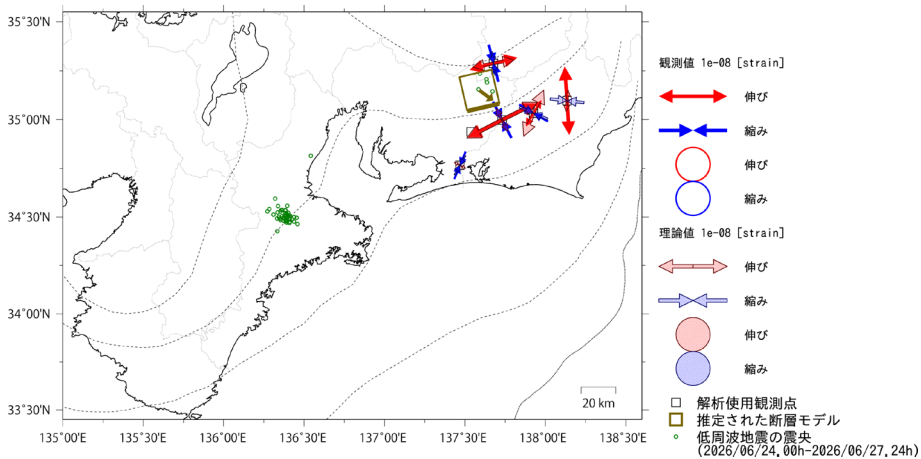
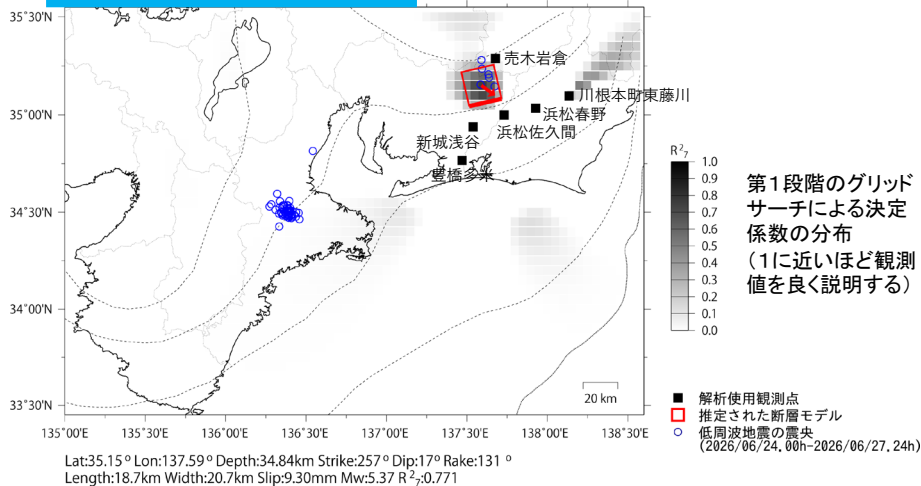
静岡県から愛知県で観測されたひずみ変化



豊橋多米は産業技術総合研究所のひずみ計である。
解析に使用したチャンネルについては背景色を塗り、そのうち有意な変化が見られたチャンネルに赤矢印を描画している。
低周波地震回数はゆっくりすべりを示す断層モデル周辺で発生したものを積算している。

東海で観測した短期的ゆっくりすべり(6月24日～27日)

2026年6月24日0時～27日24時 Mw5.4



前頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

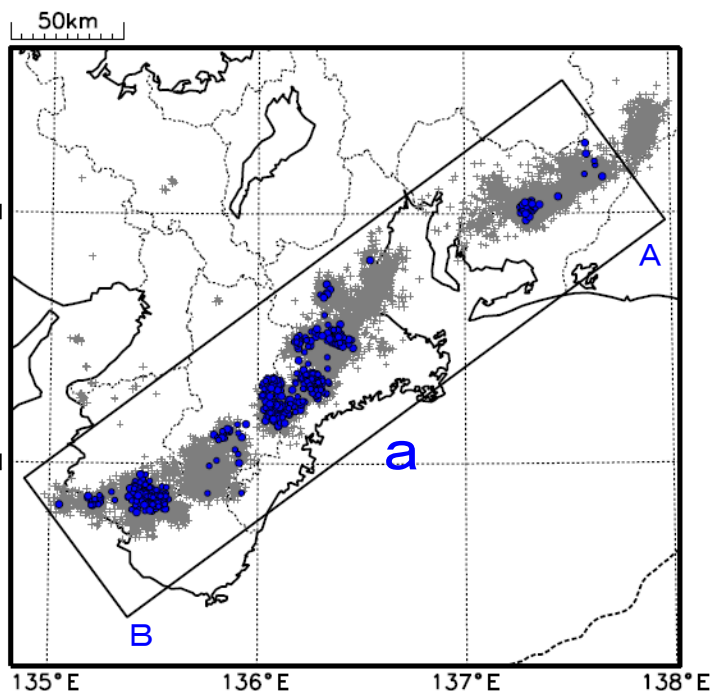
断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
 ・断層サイズを20km×20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
 ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

紀伊半島北部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

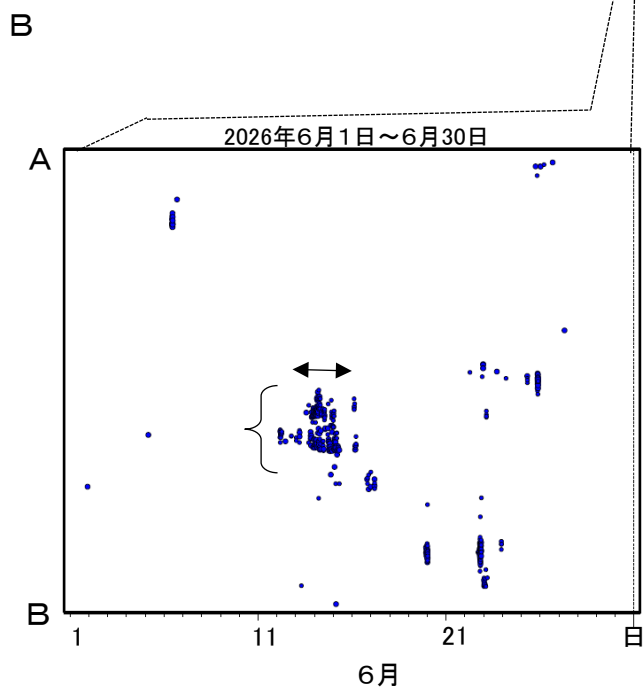
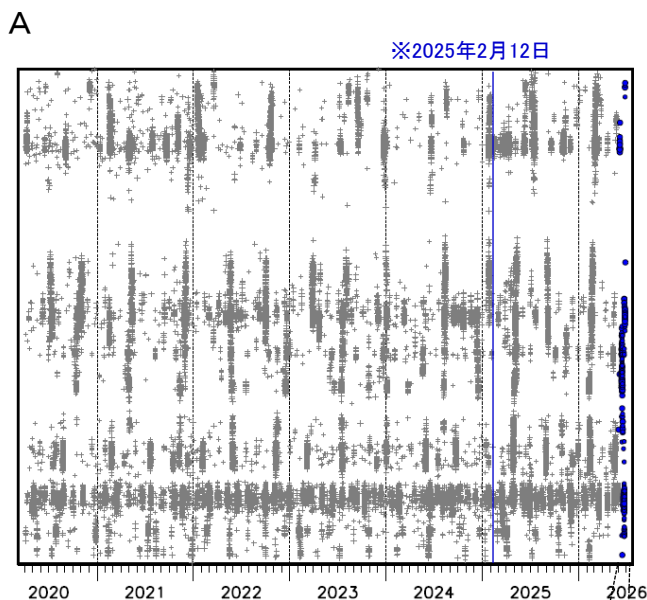
6月12日から6月16日にかけて、紀伊半島北部で深部低周波地震(微動)を観測した。
深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2020年4月1日～2026年6月30日、
深さ0～60km、Mすべて)
灰:2020年4月1日～2026年5月31日、
青:2026年6月1日以降



領域a内の時空間分布図(A-B投影)



※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

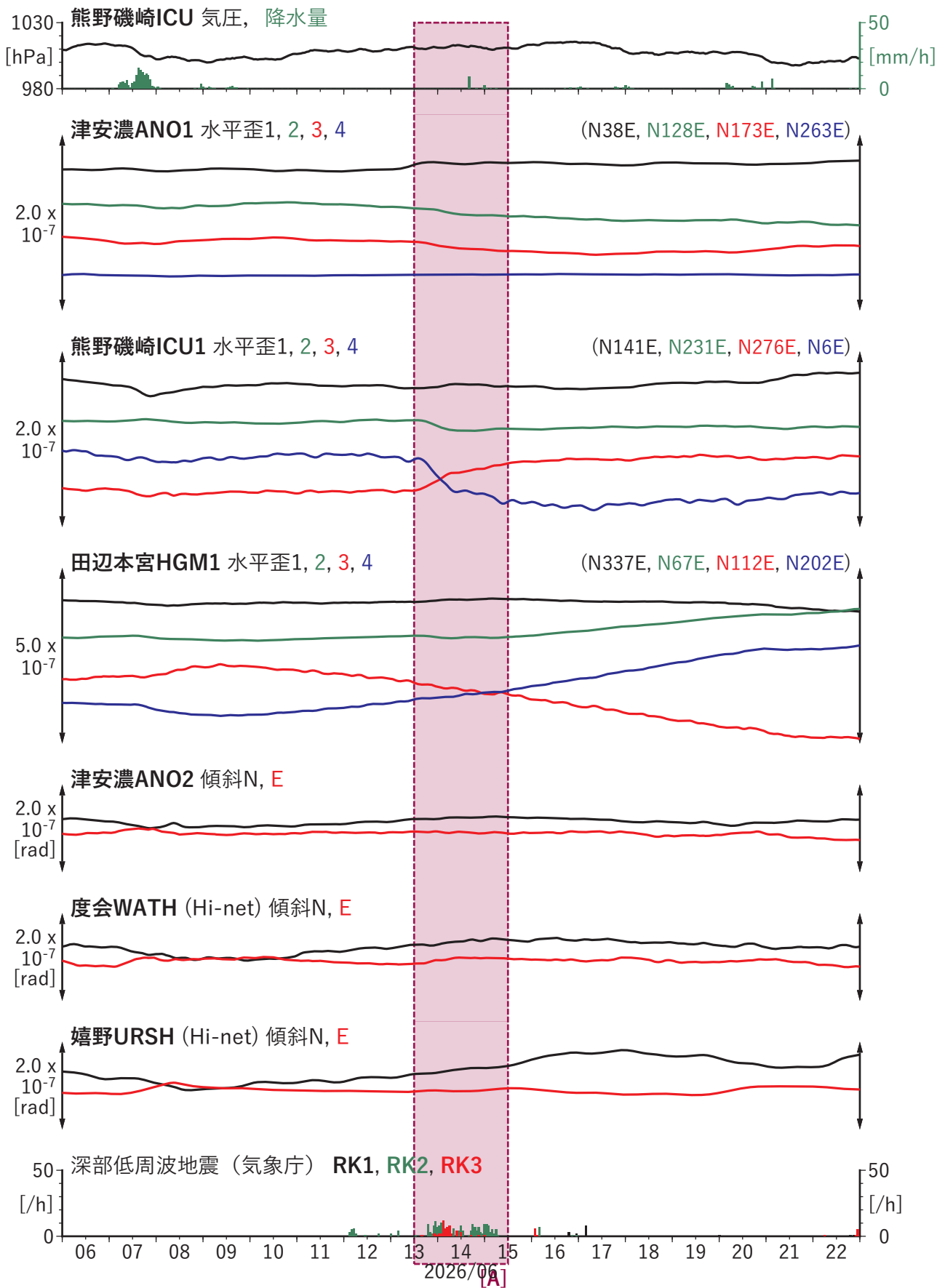
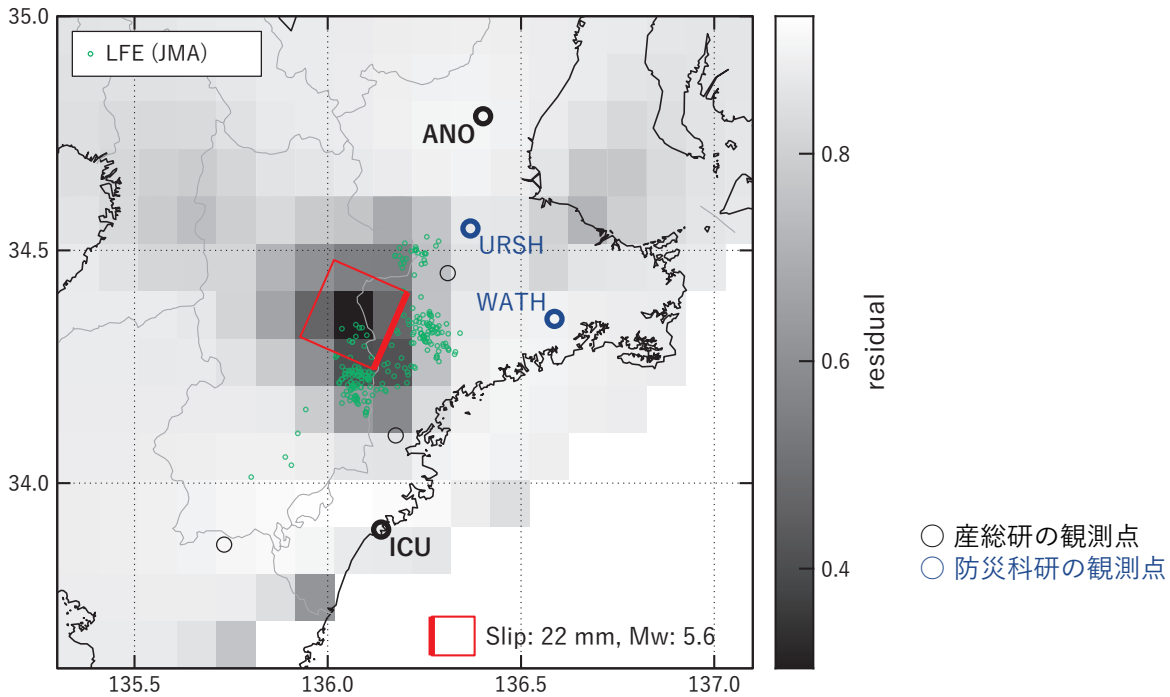


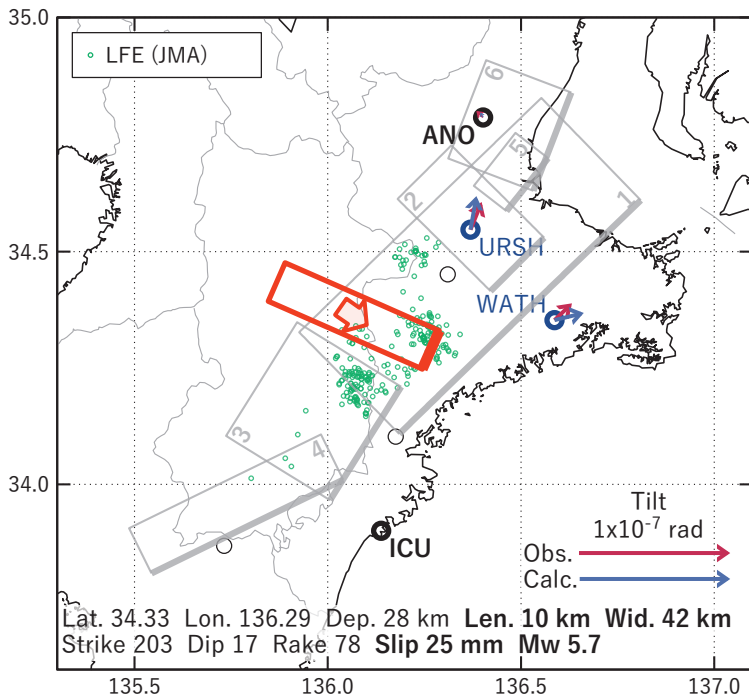
図2 歪・傾斜の時間変化 (2026/06/06 00:00-2026/06/23 00:00 (JST))

[A] 2026/06/13PM-15AM

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

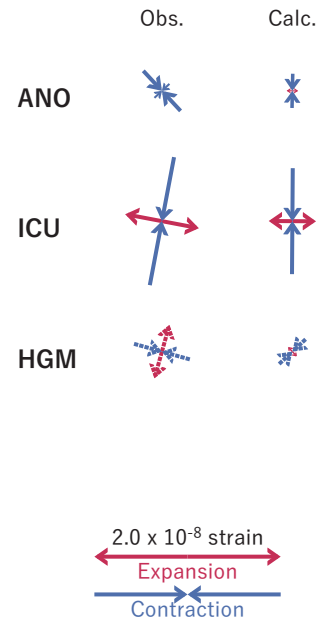


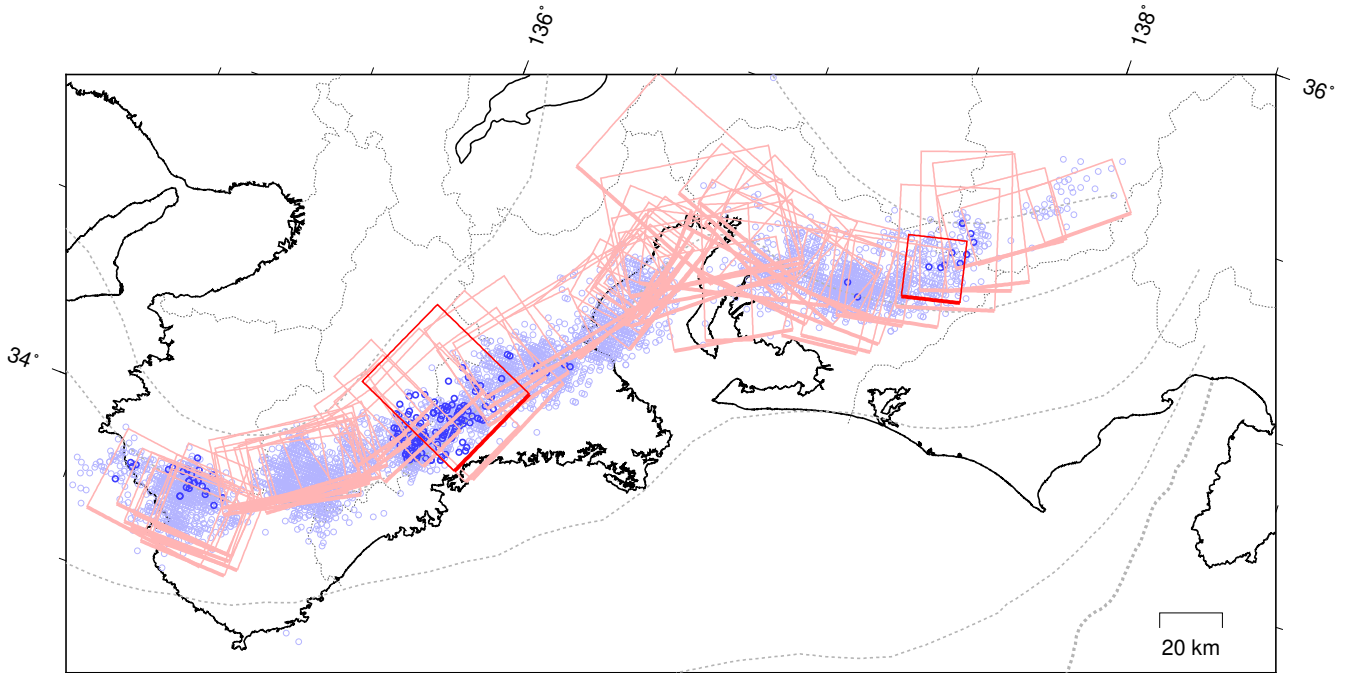
図3 2026/06/13PM-15AMの歪・傾斜変化（図2[A]）を説明する断層モデル。

- (a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
- (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面（赤色矩形）と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。
 1: 2025/05/05PM-09AM (Mw 5.9), 2: 2025/09/05-07 (Mw 5.6), 3: 2026/02/09-12AM (Mw 5.6),
 4: 2026/02/12PM-15AM (Mw 5.7), 5: 2026/02/19-20 (Mw 5.6), 6: 2026/02/21-26 (Mw 5.6),
- (b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

東海～紀伊半島 短期的ゆっくりすべりの活動状況

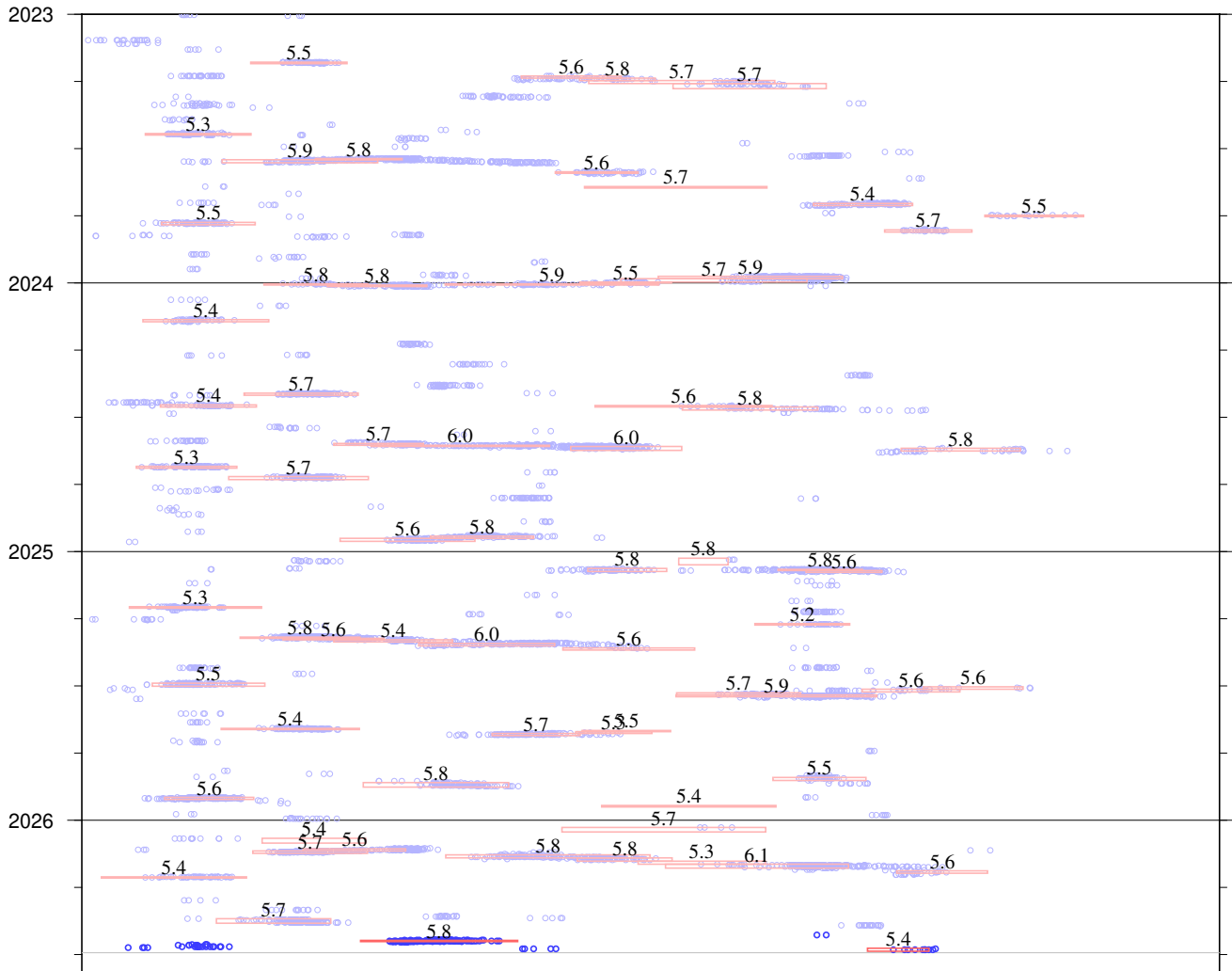
2023年1月1日～2026年6月30日

(2026年6月1日以降を濃く表示)



※破線は、フィリピン海プレート上面の等深線を示す。
 ※赤矩形は、気象庁による短期的ゆっくりすべりの断層モデル（参考解を含む）を示す。

上図の時空間分布図



※短期的ゆっくりすべりの解析には、気象庁、産業技術総合研究所及び静岡県のデータを用いている。
 ※赤矩形の上に表示されている数字は解析されたMwを示す。
 ※青丸はエンベロープ相関法（防災科学技術研究所、東京大学地震研究所との共同研究による成果）で得られた低周波微動の震央を示す。
 ※時空間分布図中の灰色線は最新データ日を示す。
 ※2024年12月以前の短期的ゆっくりすべりは再解析を行った結果を反映している。

気象庁作成

● 6月8～17日頃に四国中部において、活発な微動活動.

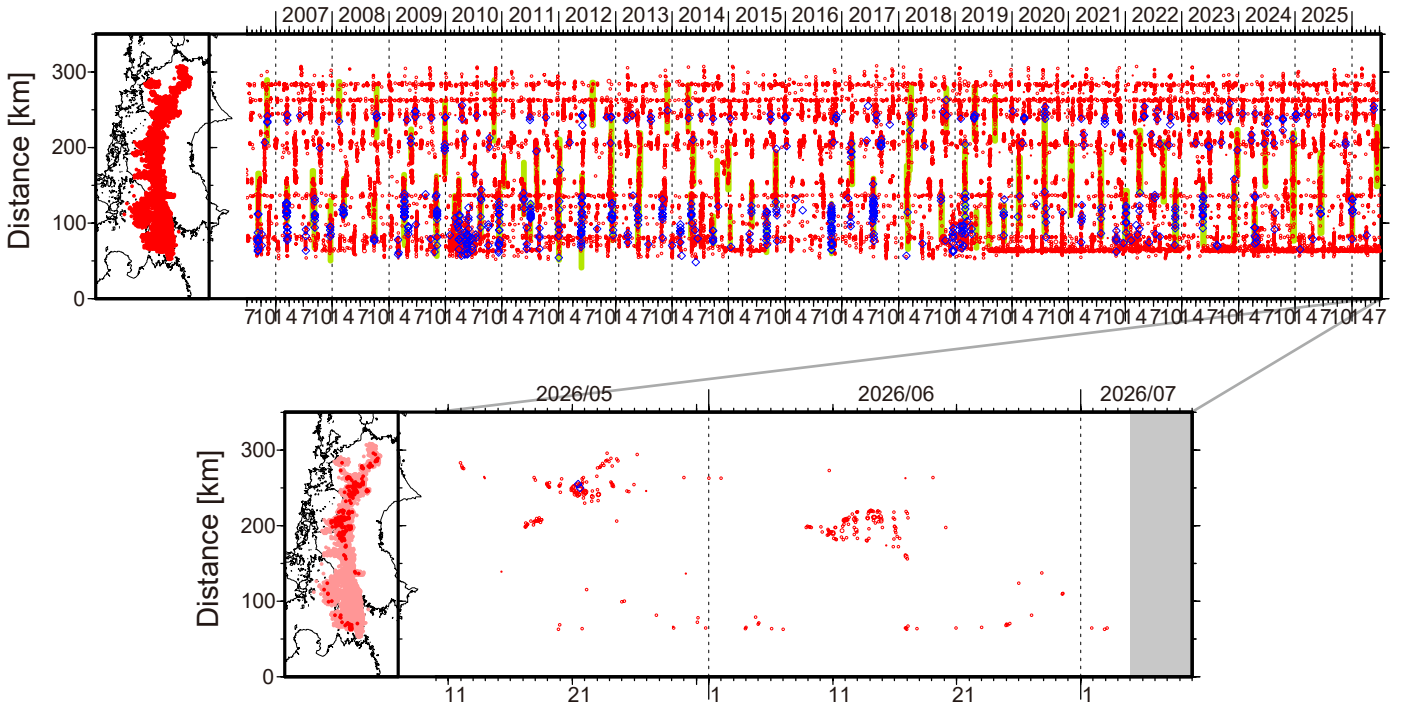


図1. 四国における2006年7月～2026年7月4日までの深部低周波微動の時空間分布(上図). 赤丸はエンベロープ相関・振幅ハイブリッド法(Maeda and Obara, 2009)およびクラスタ処理(Obara et al., 2010)によって1時間毎に自動処理された微動分布の重心である. 青菱形は周期20秒に卓越する超低周波地震(Ito et al., 2007)である. 黄緑色太線は, これまでに検出された短期的スロースリップイベント(SSE)を示す. 下図は2026年6月を中心とした期間の拡大図である. 6月8～17日頃には愛媛県東部から中部において活発な活動がみられた. この活動は, 愛媛県東部で開始し, 東西両方向への活動域の拡大がみられた. この活動に同期して短期的SSEの断層モデルも推定されている. 6月25日頃には豊後水道付近において, ごく小規模な活動がみられた.

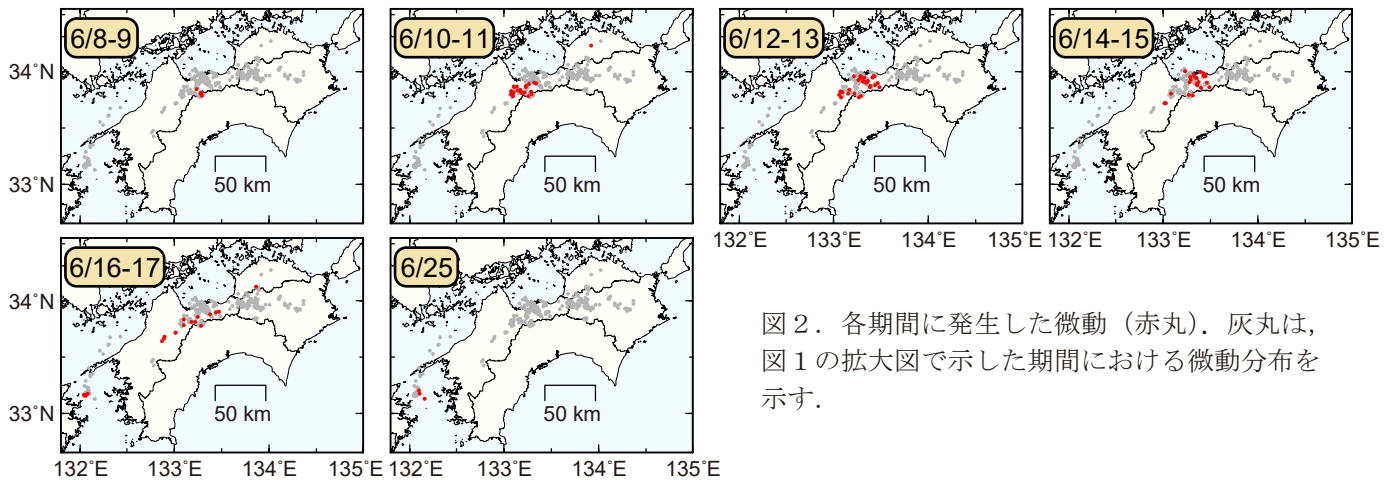


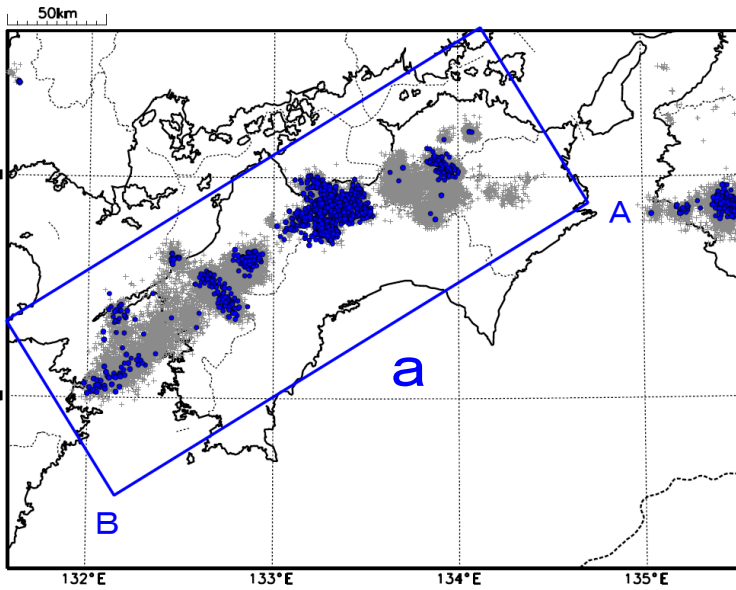
図2. 各期間に発生した微動(赤丸). 灰丸は, 図1の拡大図で示した期間における微動分布を示す.

四国中部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

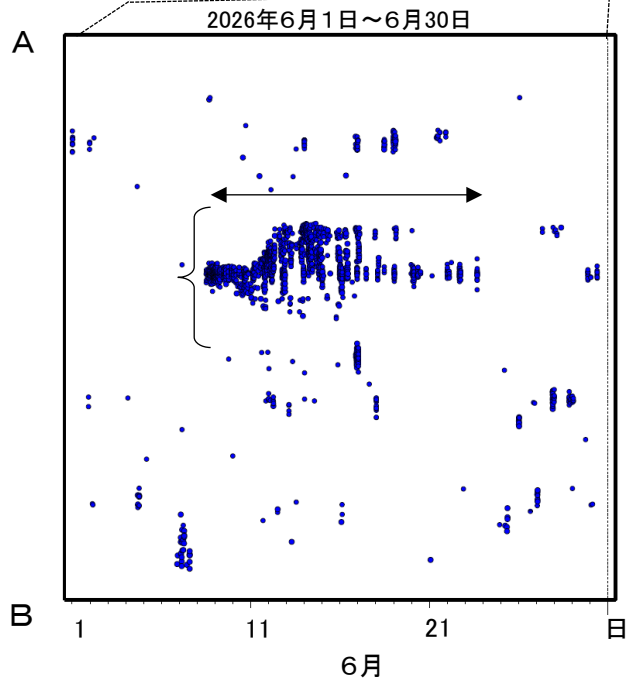
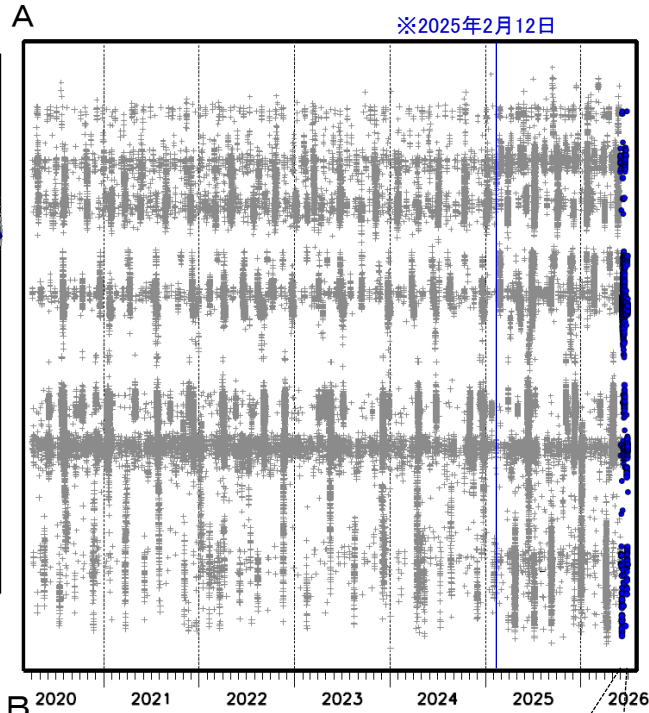
6月7日から6月23日にかけて、四国中部で深部低周波地震(微動)を観測した。
深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計・傾斜計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2020年4月1日～2026年6月30日、
深さ0～60km、Mすべて)
灰:2020年4月1日～2026年5月31日、
青:2026年6月1日以降



領域a内の時空間分布図(A-B投影)



※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

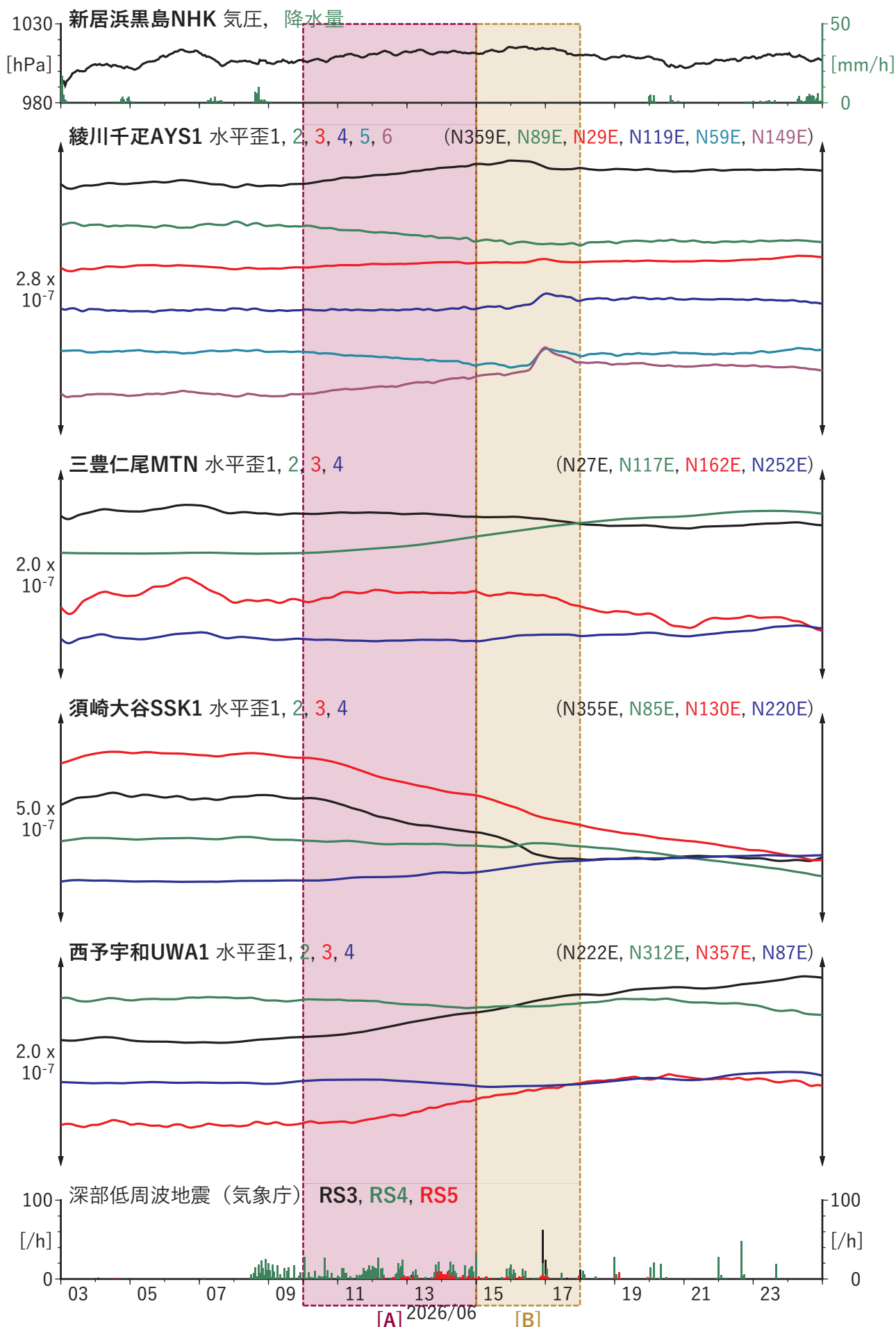


図5 歪・傾斜の時間変化(1) (2026/06/03 00:00-2026/06/25 00:00 (JST))

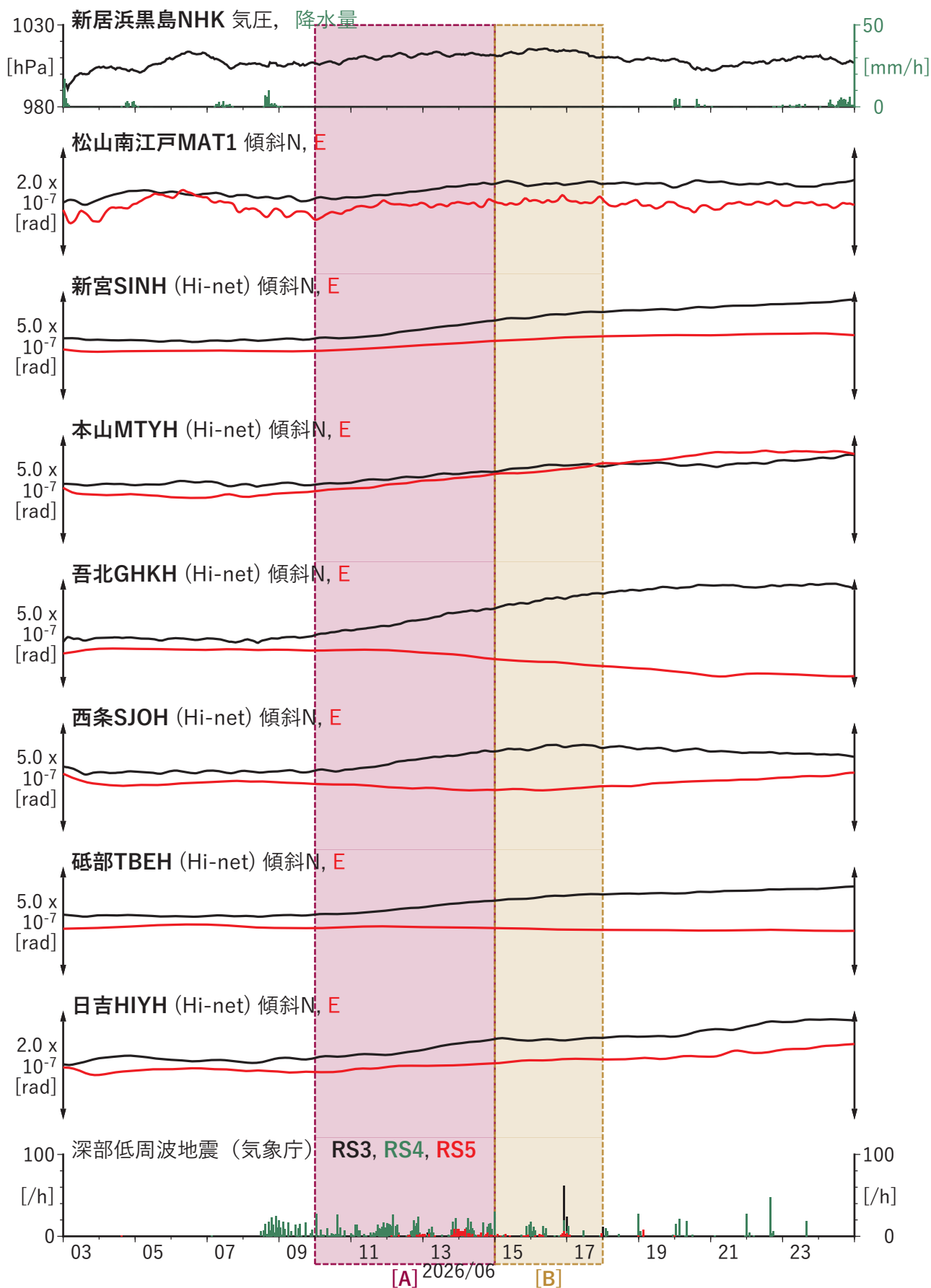
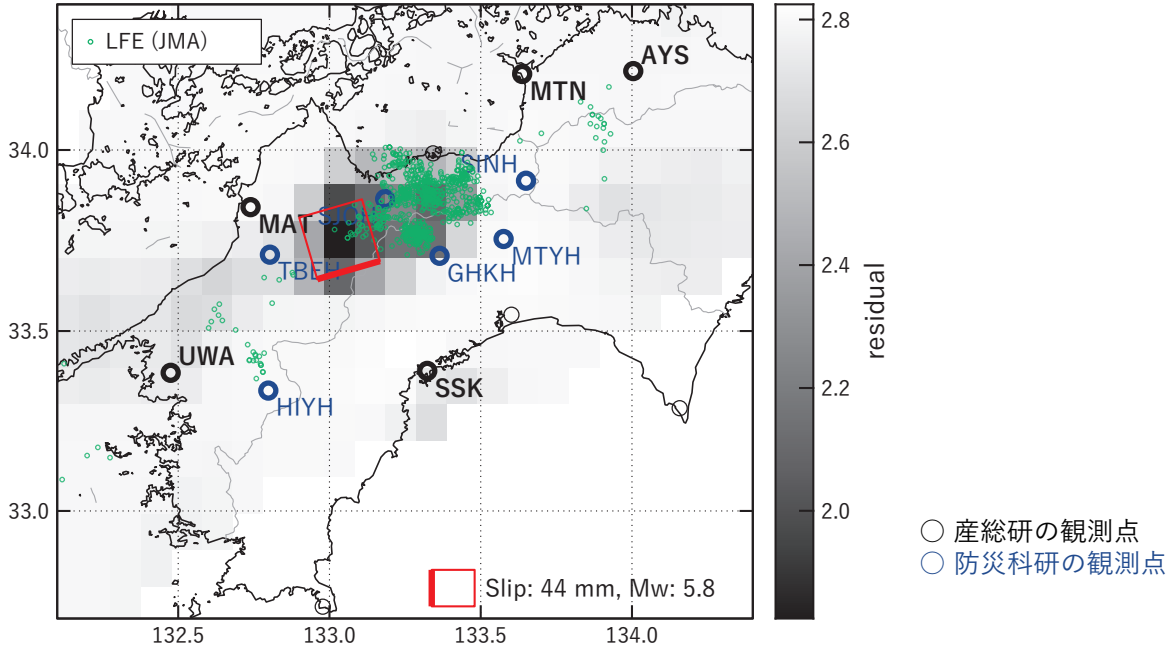


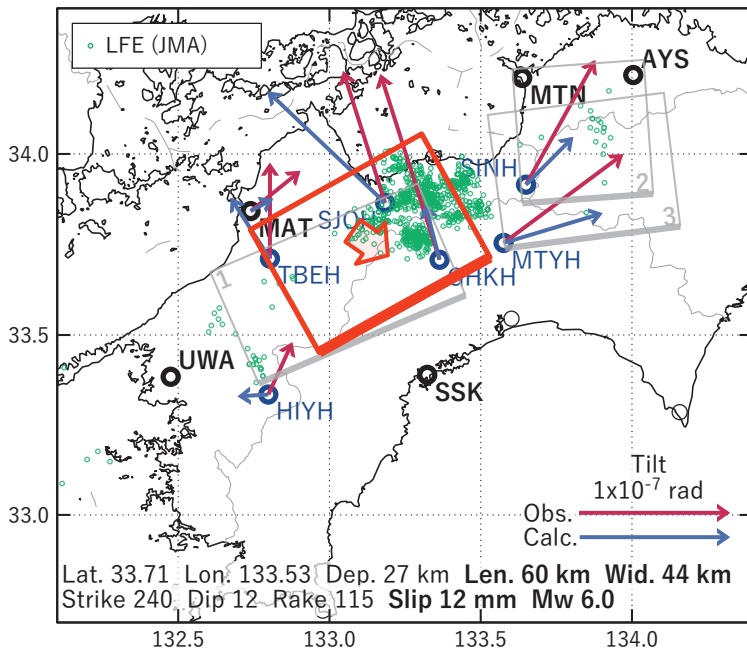
図5 歪・傾斜の時間変化(2) (2026/06/03 00:00-2026/06/25 00:00 (JST))

[A] 2026/06/10-14

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

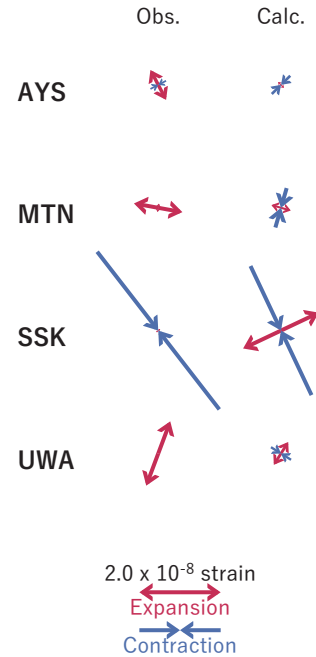
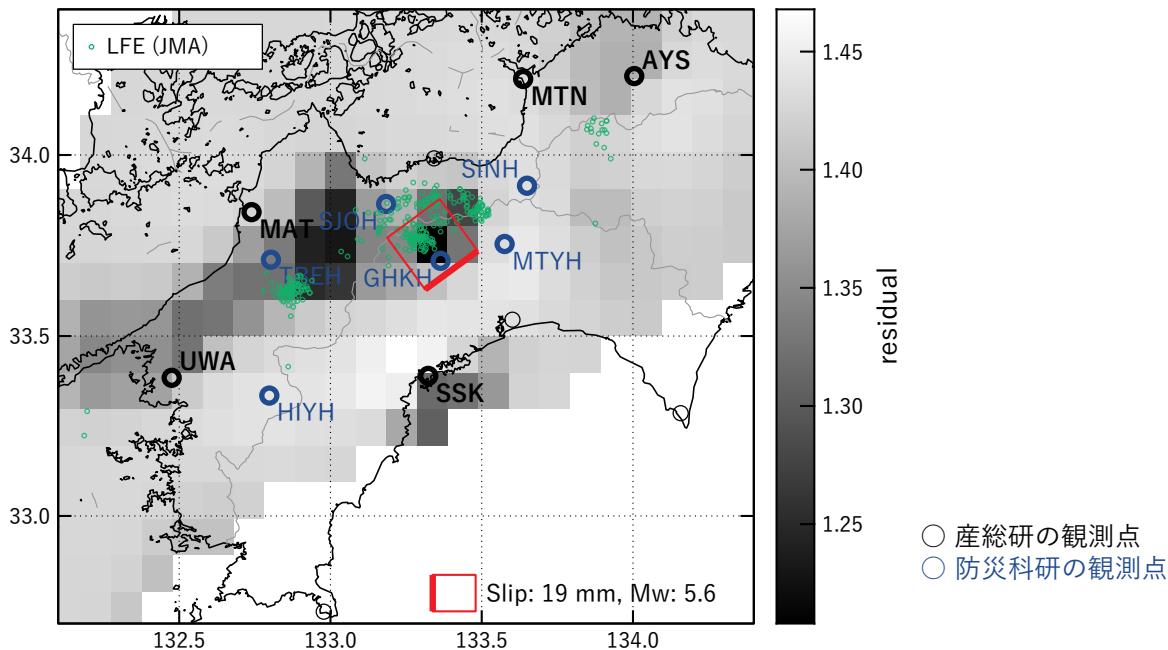


図6 2026/06/10-14の歪・傾斜変化(図5[A])を説明する断層モデル。

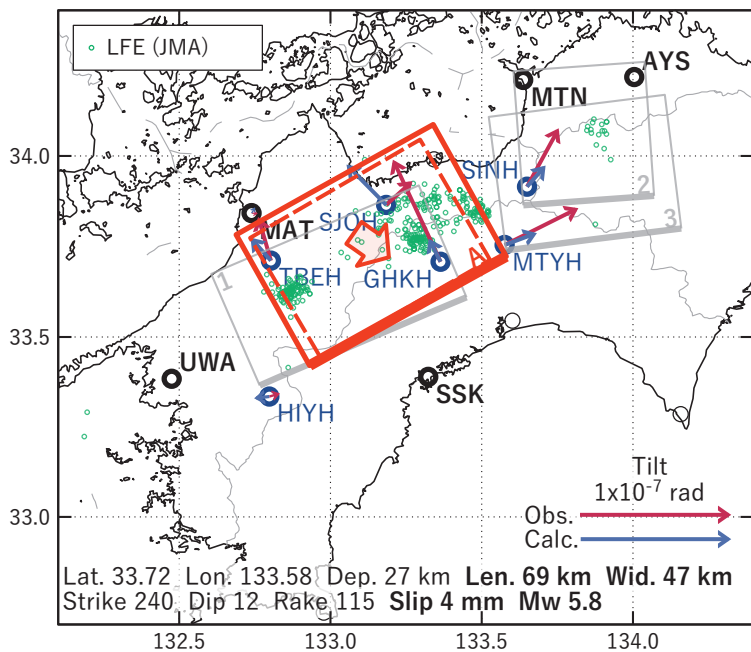
- (a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
- (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。
1: 2026/05/01PM-08AM (Mw 6.0), 2: 2026/05/09PM-15AM (Mw 5.6), 3: 2026/05/19-22 (Mw 5.6)
- (b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

[B] 2026/06/15-17

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

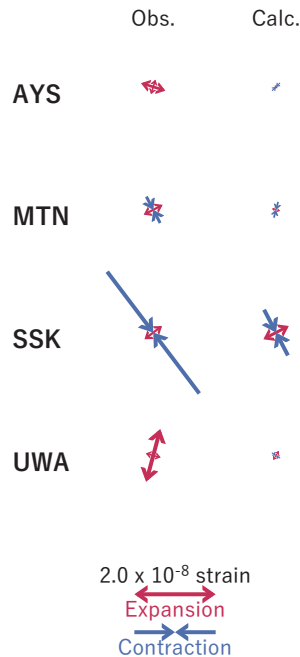
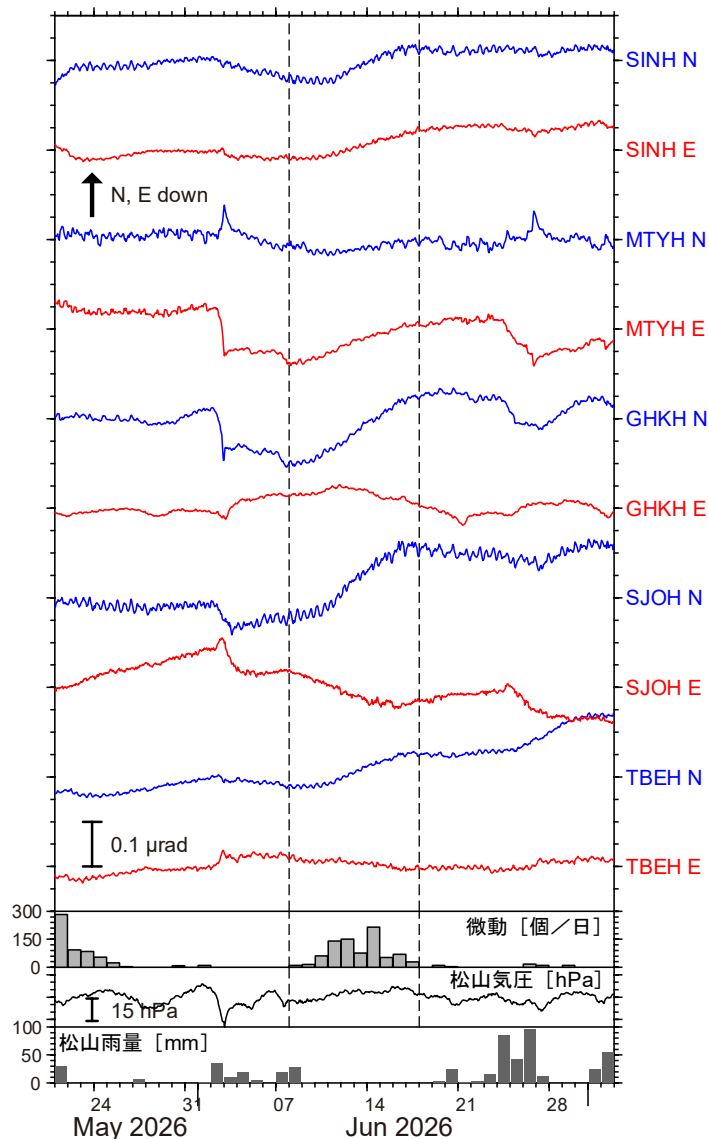


図7 2026/06/15-17の歪・傾斜変化(図5[B])を説明する断層モデル。

- (a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
- (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。赤色破線矩形は今回の一連のイベント。
 1: 2026/05/01PM-08AM (Mw 6.0), 2: 2026/05/09PM-15AM (Mw 5.6), 3: 2026/05/19-22 (Mw 5.6),
 A: 2026/06/10-14 (Mw 6.0)
- (b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。



- ・ 四国中部を活動域とするスロースリップイベント (M_W 6.1)
- ・ 2024年12月 (M_W 6.2, 四国中西部) 以来約1年半ぶり

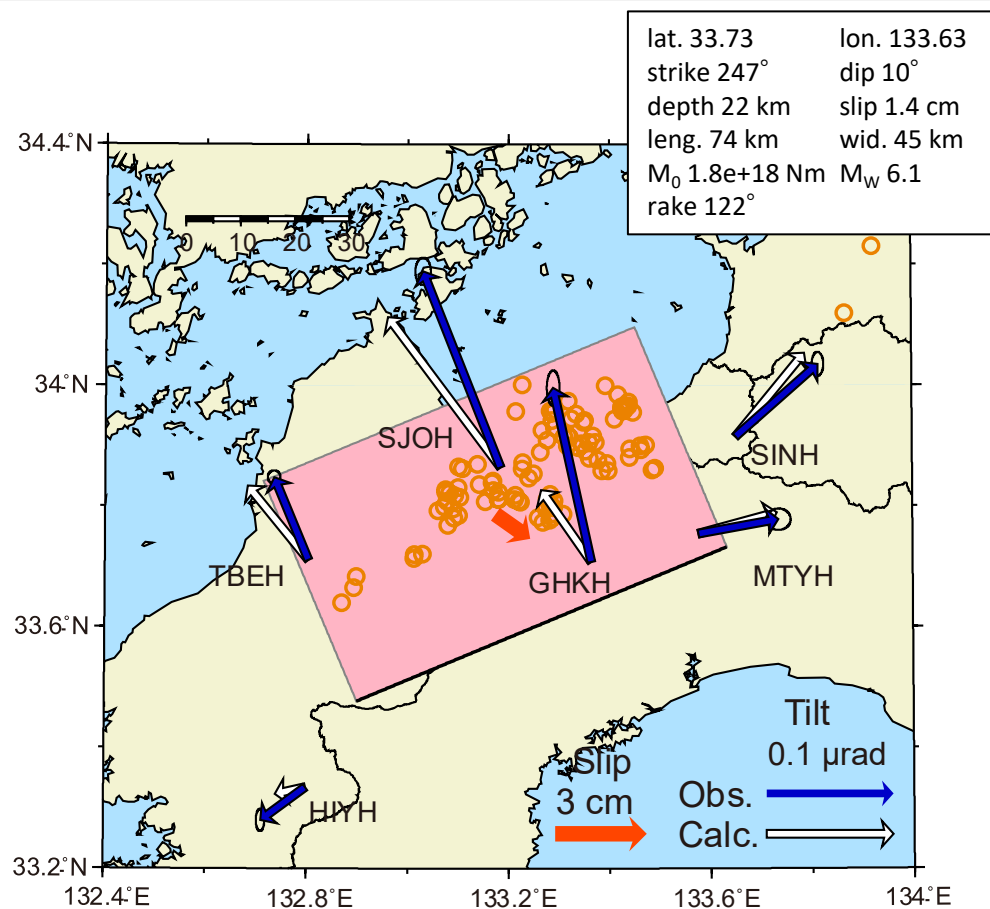


図2：6月8日～17日に観測された傾斜変化ベクトル（青矢印），推定されたスロースリップイベントの断層モデル（赤矩形・矢印），モデルから計算される傾斜変化ベクトル（白抜き矢印）を示す．1時間毎の微動エネルギーの重心位置（橙丸）を合わせて示す．すべり角はプレート相対運動方向に固定している．

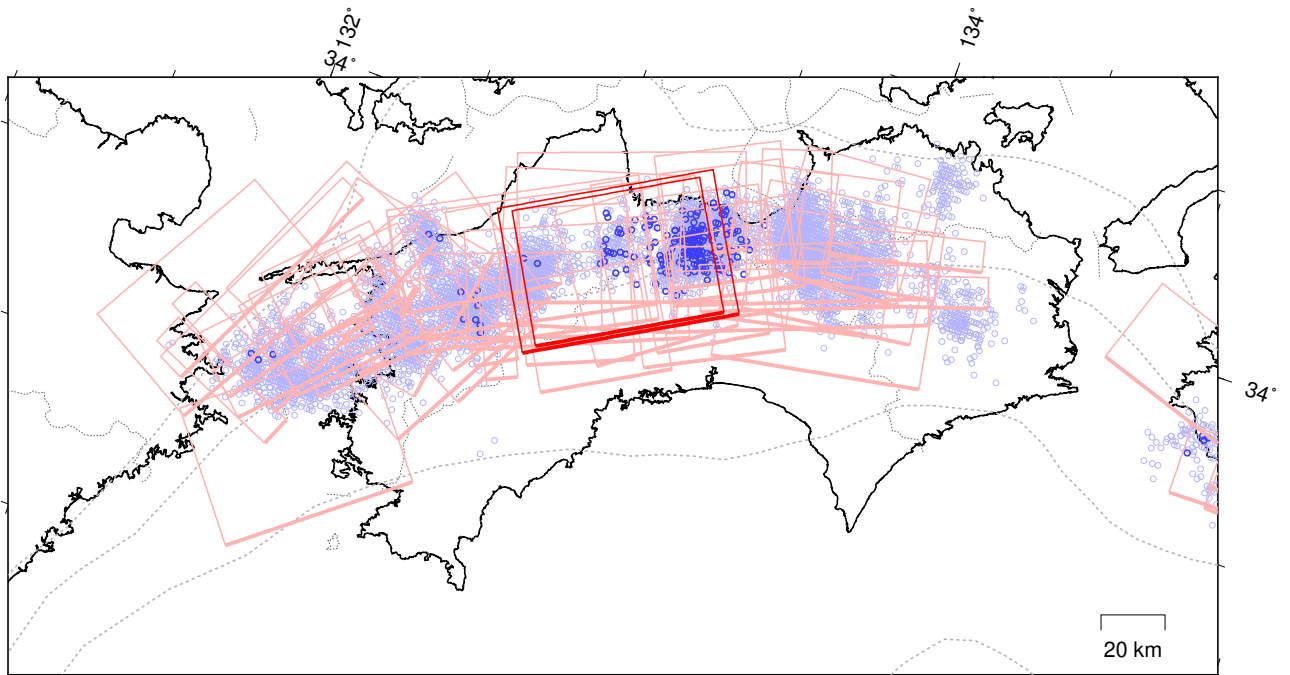
図1：2026年5月21日～7月2日の傾斜時系列．上方方向への変化が北・東下がりの傾斜変動を表し，BAYTAP-Gにより潮汐・気圧応答成分を除去した．6月8日～17日の傾斜変化ベクトルを図2に示す．四国中部での微動活動度・気象庁松山観測点の気圧・雨量を合わせて示す．

謝辞
 気象庁のWebページで公開されている気象データを使用させていただきました．
 記して感謝いたします．
 防災科学技術研究所資料

四国 短期的ゆっくりすべりの活動状況

2023年1月1日～2026年6月30日

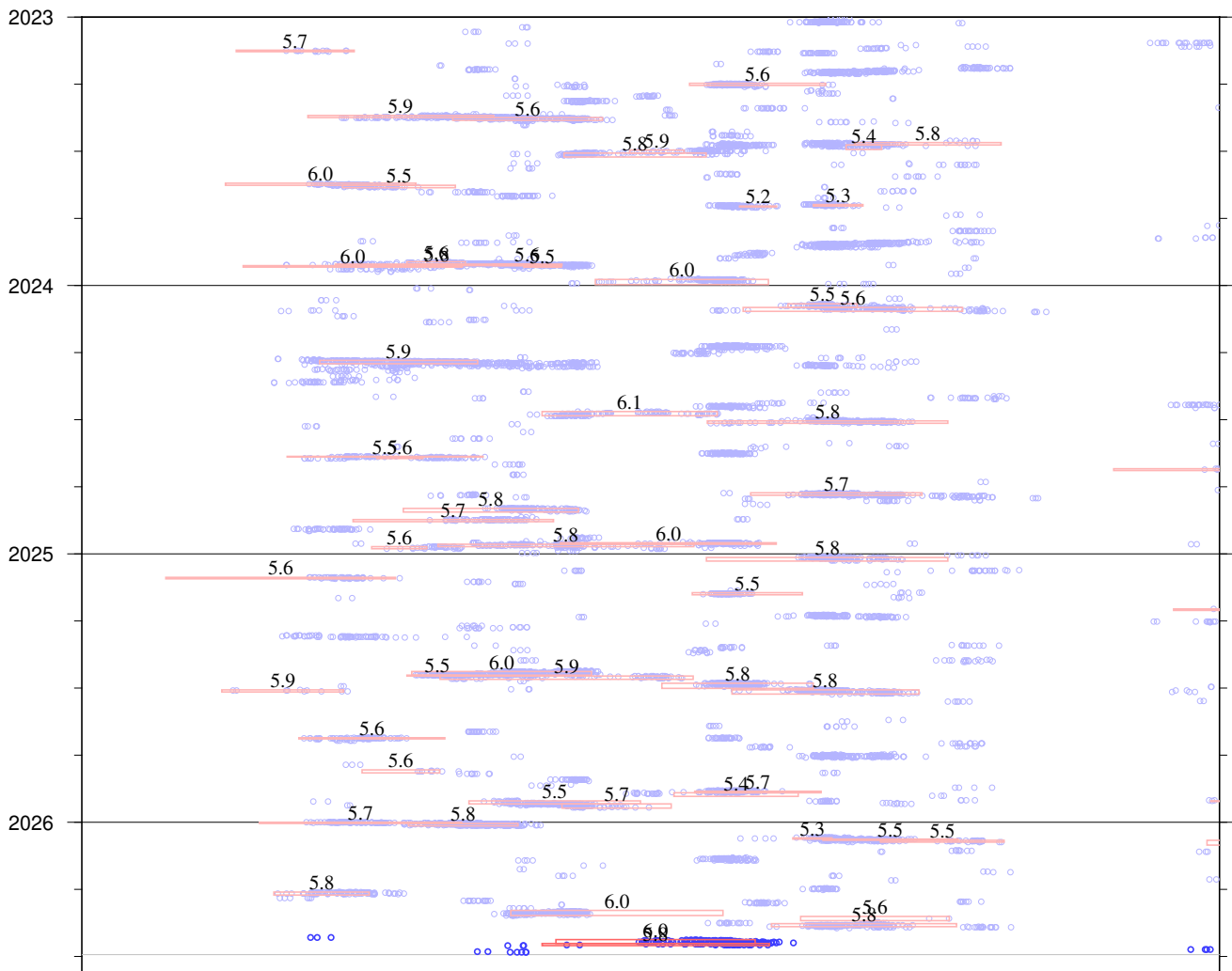
(2026年6月1日以降を濃く表示)



※破線は、フィリピン海プレート上面の等深線を示す。

※赤矩形は、産業技術総合研究所による短期的ゆっくりすべりの断層モデルを示す。

上図の時空間分布図



※短期的ゆっくりすべりの解析には、産業技術総合研究所及び防災科学技術研究所のデータを用いている。

※赤矩形の上に表示されている数字は解析されたMwを示す。

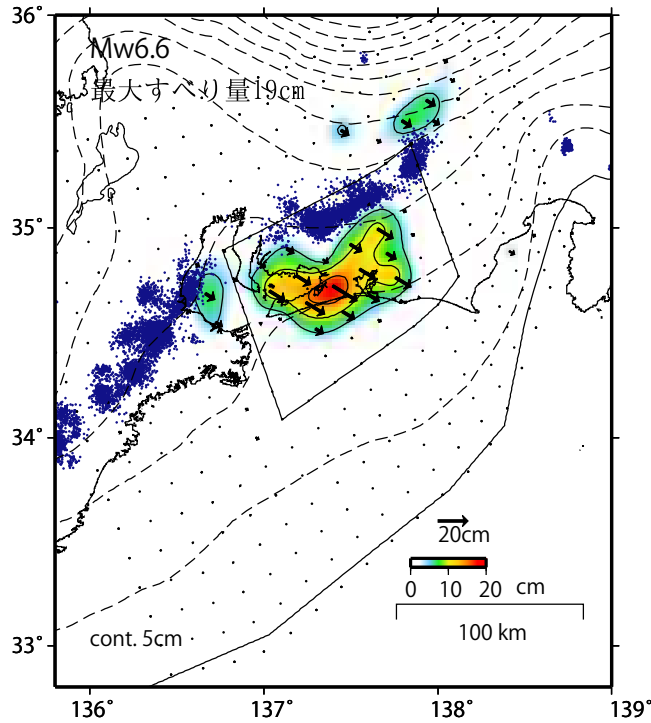
※青丸はエンベロープ相関法（防災科学技術研究所、東京大学地震研究所との共同研究による成果）で得られた低周波微動の震央を示す。

※時空間分布図中の灰色線は最新データ日を示す。

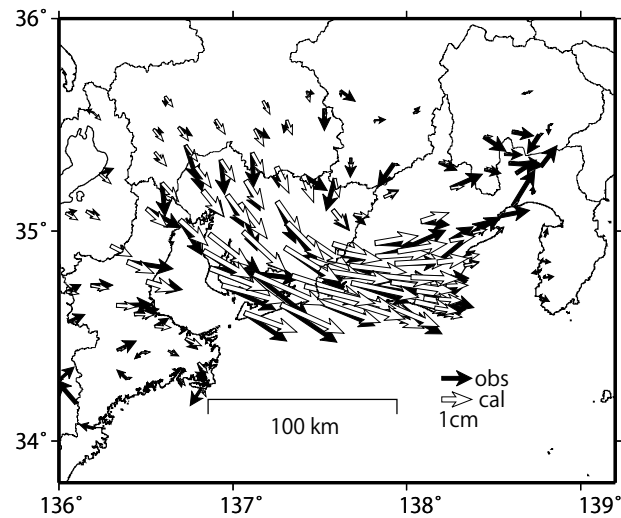
気象庁作成

GNSSデータから推定された東海地域の長期的ゆっくりすべり(暫定)

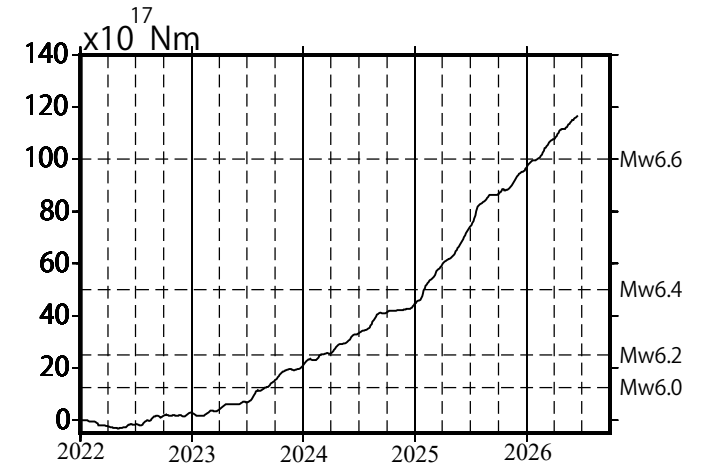
推定すべり分布
(2022-01-01/2026-06-18)



観測値(黒)と計算値(白)の比較
(2022-01-01/2026-06-18)



モーメント時系列(試算)



Mw及び最大すべり量はプレート面に沿って評価した値を記載している。
すべり量(カラー)及びすべりベクトルは水平面に投影したものを示している。
推定したすべり量が標準偏差(σ)の3倍以上のグリッドを黒色で示している。

使用データ: GEONETによる日々の座標値(F5.1解、R5.1解)

F5.1解(2021-07-01/2022-05-30) + R5.1解(2026-05-31/2026-06-18)

トレンド期間: 2020-01-01/2022-01-01 (年周・半年周成分は補正していない)

モーメント計算範囲: 左図の黒枠内側

観測値: 3日間の平均値をカルマンフィルターで平滑化した値

黒破線: フィリピン海プレート上面の等深線(Hirose et al., 2008)

すべり方向: プレートの沈み込み方向に拘束

青丸: 低周波地震(気象庁一元化震源)(期間: 2022-01-01/2026-06-18)

モーメント: 断層運動のエネルギーの目安となる量。

解析での補正内容

* 電子基準点の保守等による変動

* 共通誤差成分を推定

* 平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の粘弾性変形(Suito 2017)

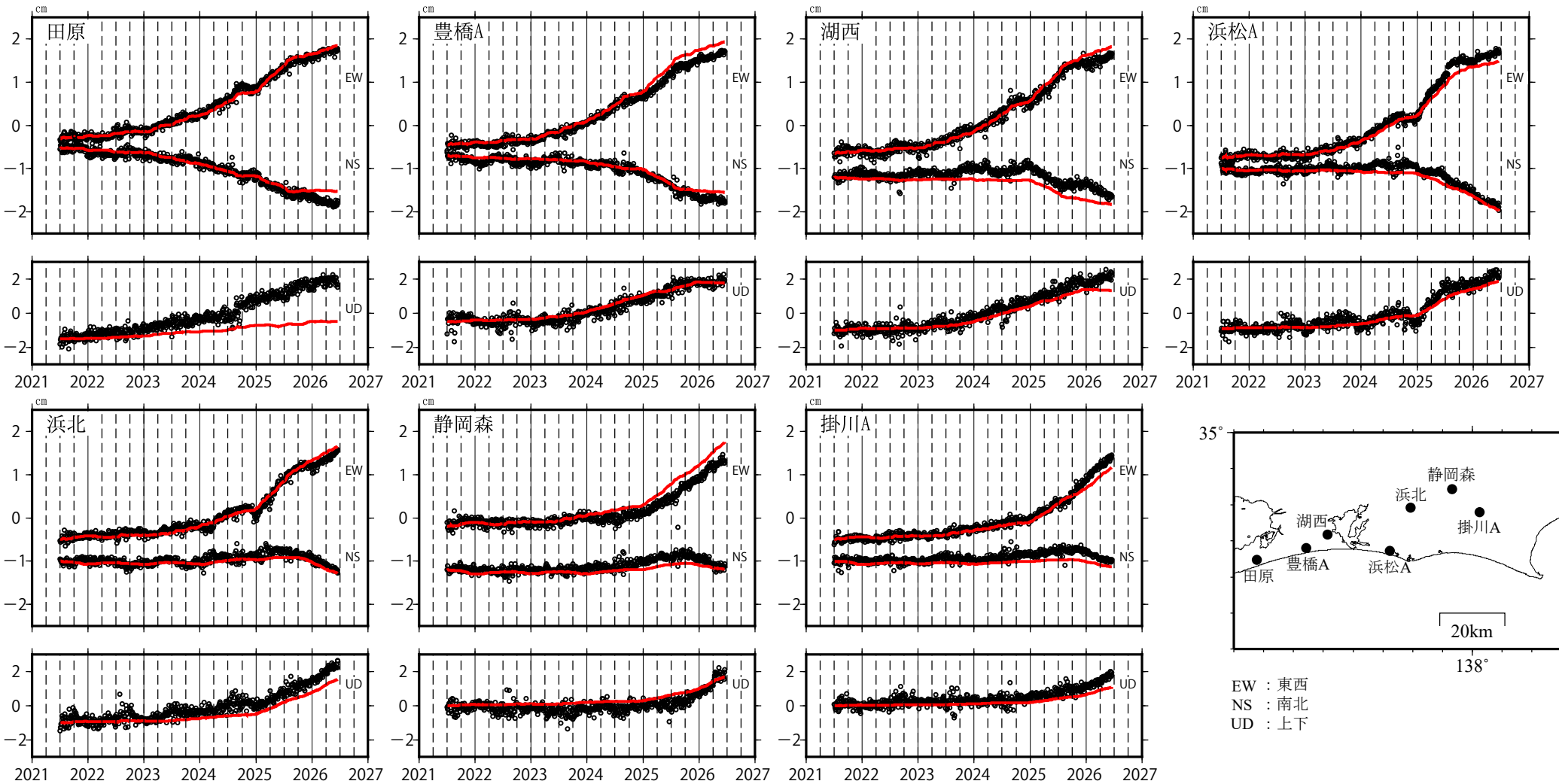
* 令和6年能登半島地震に伴う地殻変動

* 令和6年能登半島地震の粘弾性変形(Suito 2025)

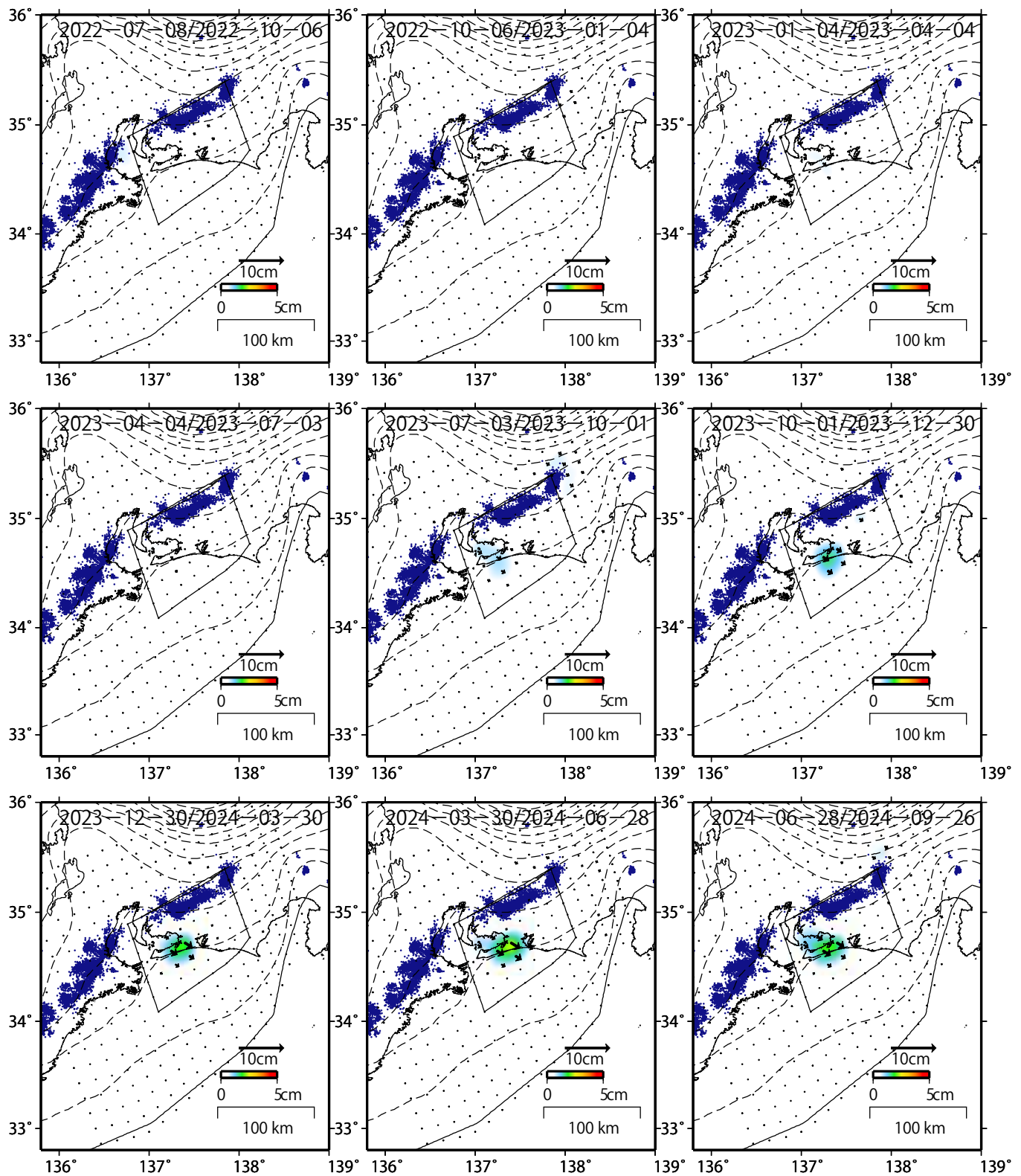
* 短期的ゆっくりすべりに伴う地殻変動(2017-01/2026-05-24: 気象庁カタログによる)

固定局: 三隅

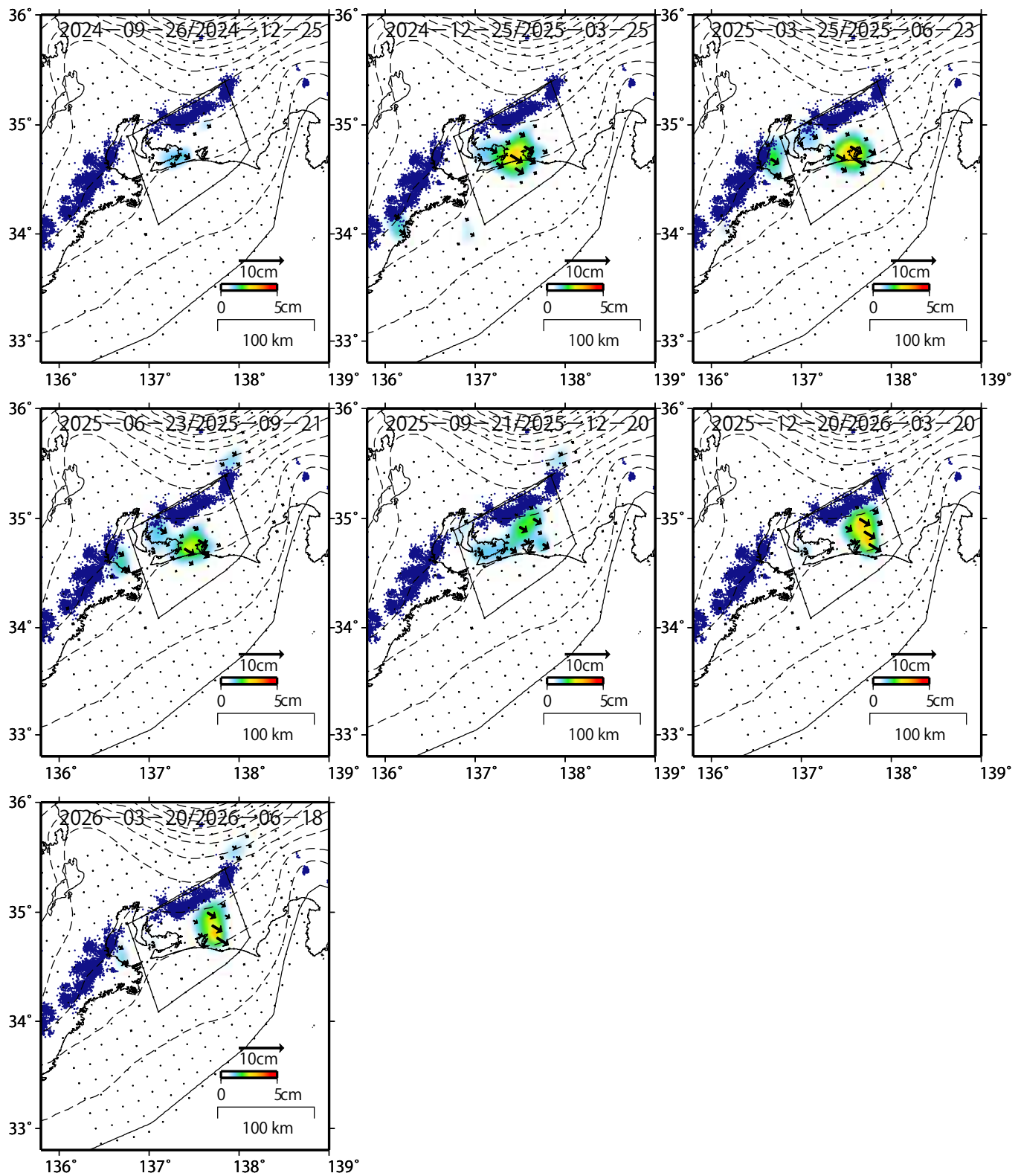
東海地域の観測点の座標時系列(黒丸)と計算値(赤線)
時間依存のインバージョン



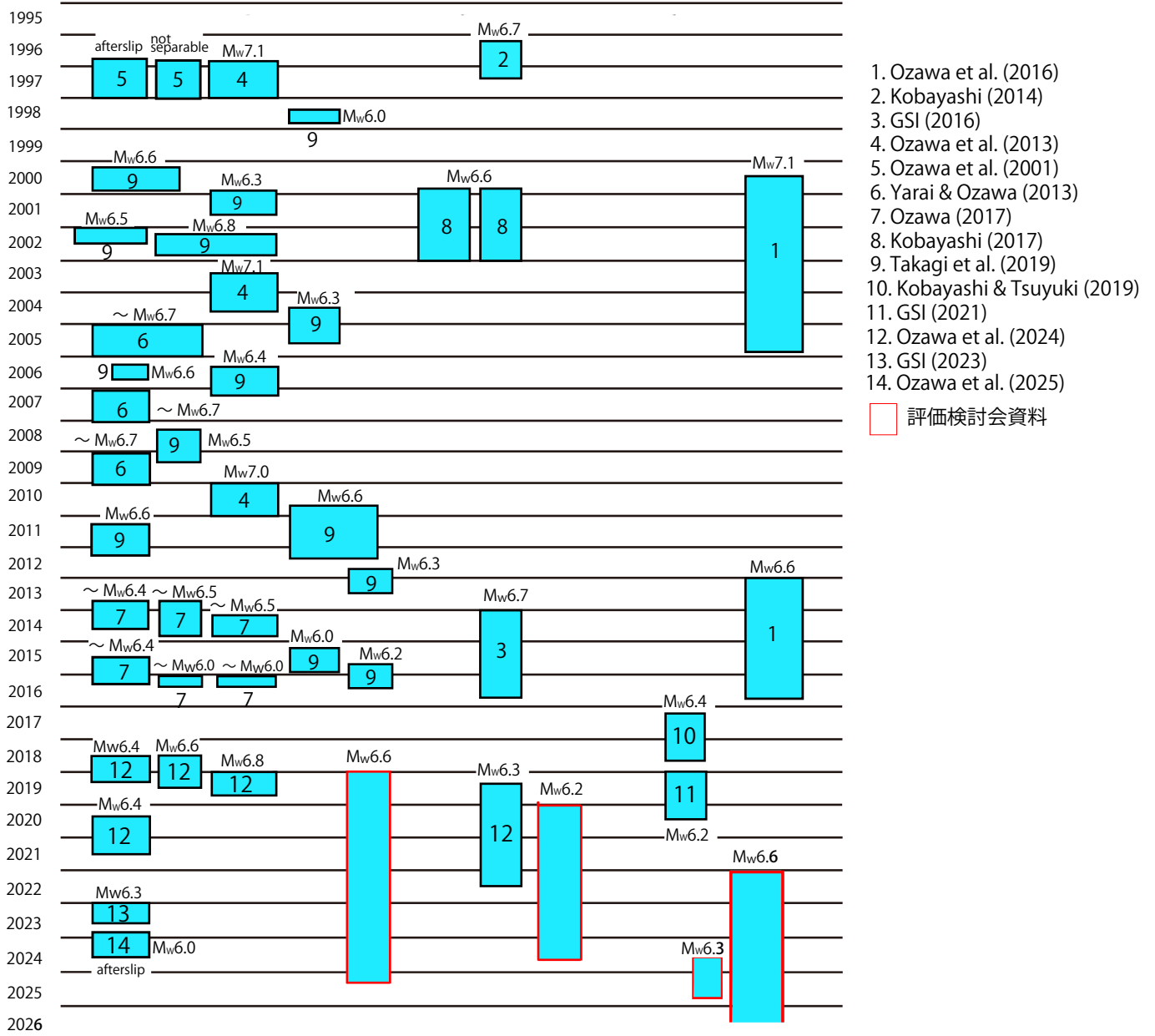
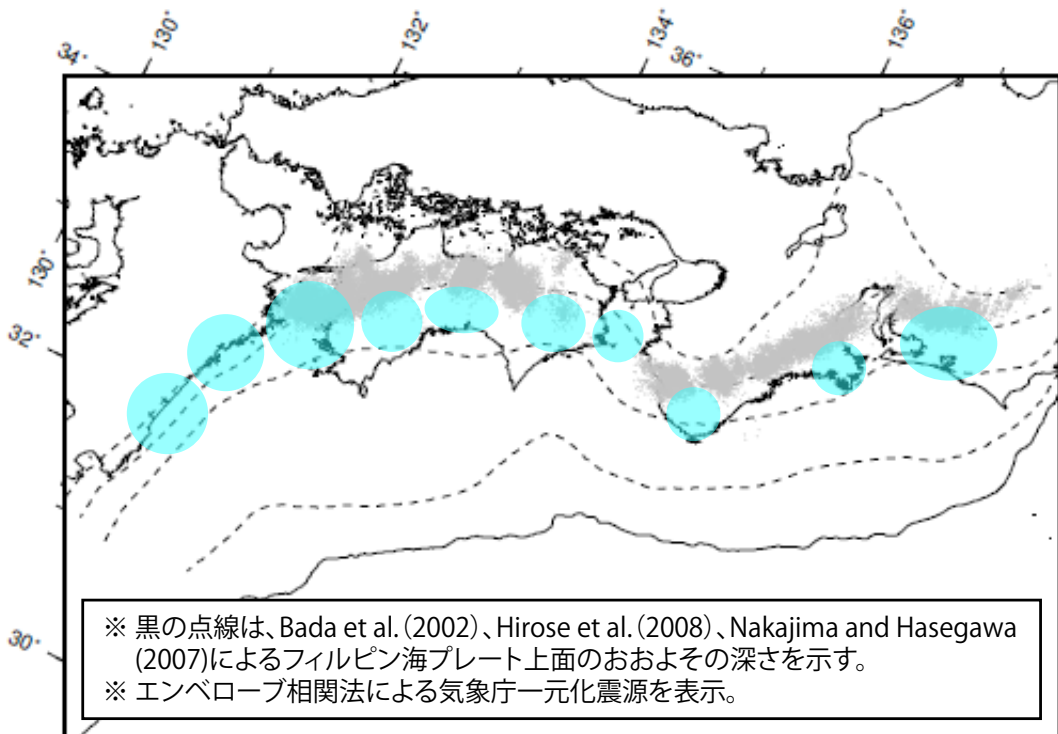
GNSSデータから推定された東海地域の長期的ゆっくりすべり（暫定）
推定すべり分布の時間変化（3か月ごと）



GNSSデータから推定された東海地域の長期的ゆっくりすべり（暫定）
推定すべり分布の時間変化（3か月ごと）



長期的ゆっくりすべりの全体概要



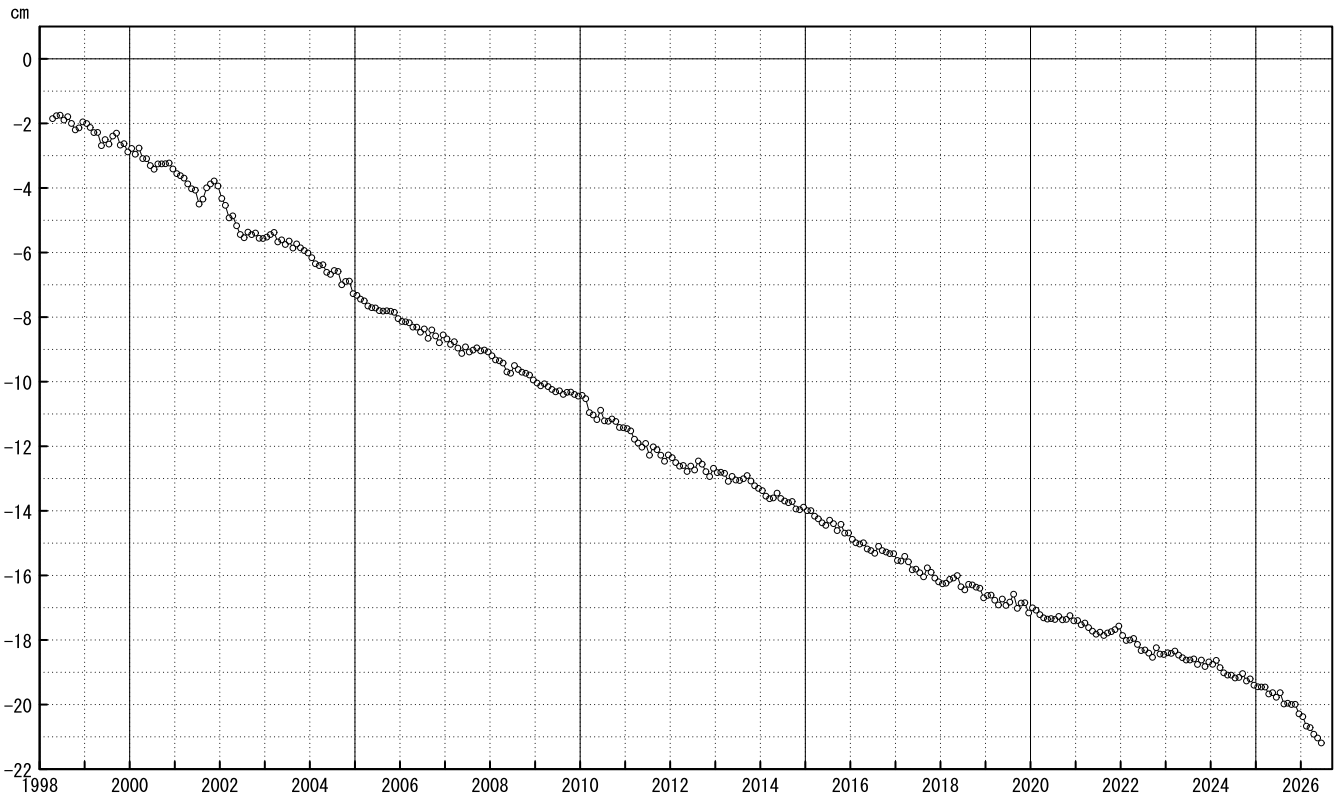
※ 本資料は、評価検討会における評価結果やOzawa et al.(2024)等をもとに、長期的ゆっくりすべりの発生場所と時期を模式的に示した図である。それぞれのゆっくりすべりの詳細については、各文献等を参照願います。

御前崎 電子基準点の上下変動

水準測量と GNSS 連続観測

掛川に対して、御前崎が沈降する長期的な傾向が続いている。

掛川 A (161216) - 御前崎 A (091178)

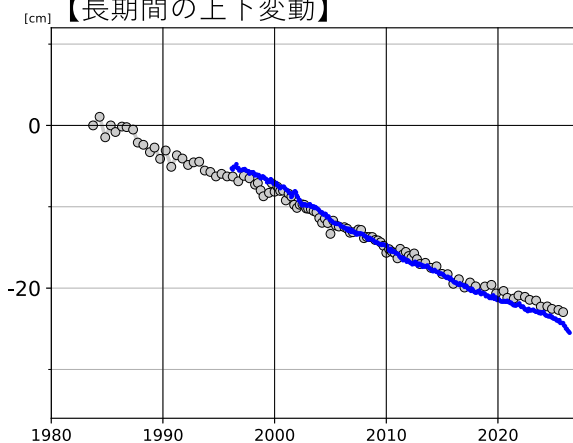


○ : GNSS 連続観測 (GEONET 月平均値)

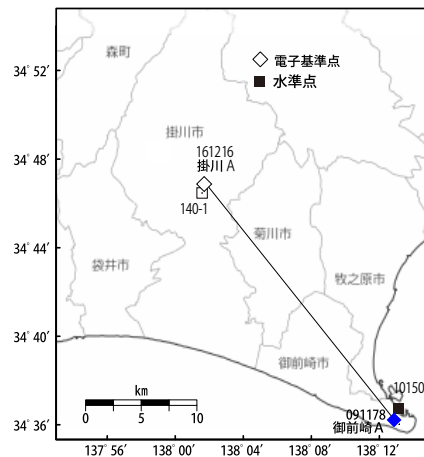
・ GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5.1 : 最終解) から計算した値の月平均値。最新のプロット点は 6 月 1 日~6 月 6 日の平均。

- ※ 1 2009 年 8 月 11 日の駿河湾の地震に伴う電子基準点「御前崎」の局所的な変動について、地震前後の水準測量で得られた「御前崎」周辺の水準点との比高の差を用いて補正を行った。
- ※ 2 電子基準点「御前崎 A」については、2010 年 3 月 23 日まで電子基準点「御前崎」のデータを使用。
- ※ 3 電子基準点「掛川 A」については、2017 年 1 月 29 日まで電子基準点「掛川」のデータを使用。
- ※ 4 2026 年初頭頃から見られる沈降速度の増加は、東海地方の長期的ゆっくりすべりのすべりの中心が浜名湖の東側へ移動していることに伴う電子基準点「掛川 A」等での変動の影響によるものである。

【長期間の上下変動】



「固定局：掛川 A (161216)」

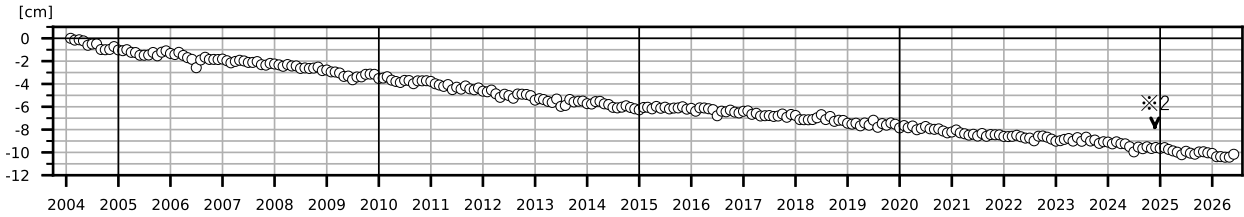


- ・ 青色のプロットは上記の GEONET による日々の座標値の月平均値。
- ・ 灰色のプロットは電子基準点の最寄りの水準点「10150」の水準測量結果を示している (固定：140-1)。

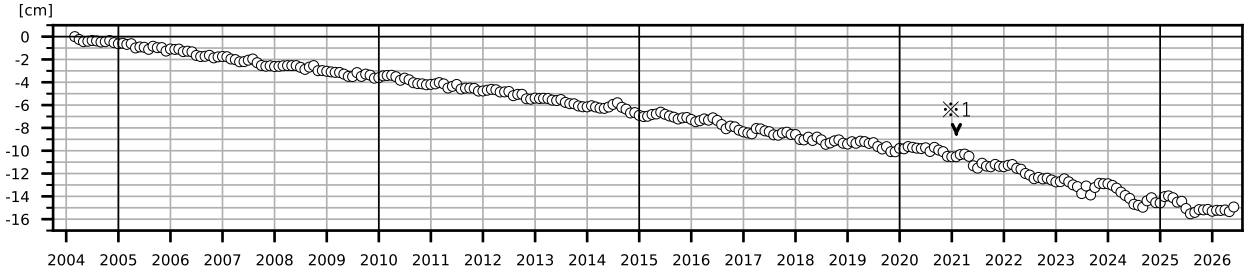
紀伊半島及び室戸岬周辺 電子基準点の上下変動

潮岬周辺及び室戸岬周辺の長期的な沈降傾向が続いている。

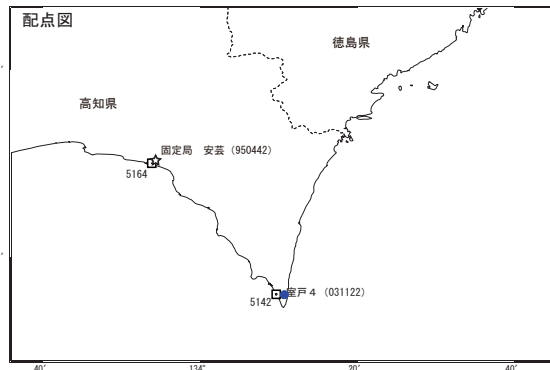
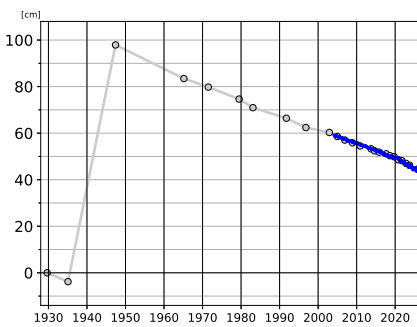
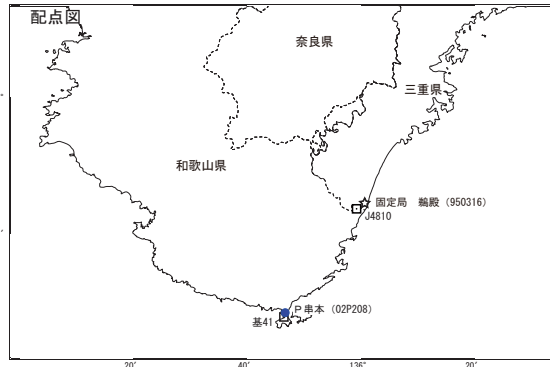
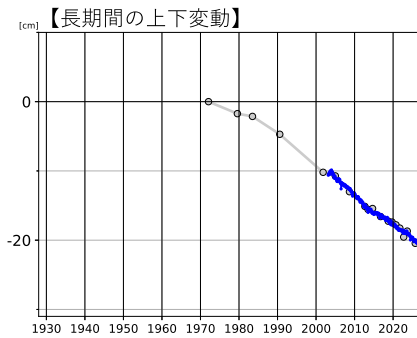
鵜殿 (950316) - P串本 (02P208)



安芸 (950442) - 室戸 4 (031122)



○ : GNSS 連続観測 (GEONET 月平均値)



- GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5.1 : 最終解) から計算した値の月平均値である。(最新のプロット点 : 6月1日~6月13日の平均値)
- 灰色のプロットは電子基準点の最寄りの水準点の水準測量結果を示している (固定 : J4810、5164)。

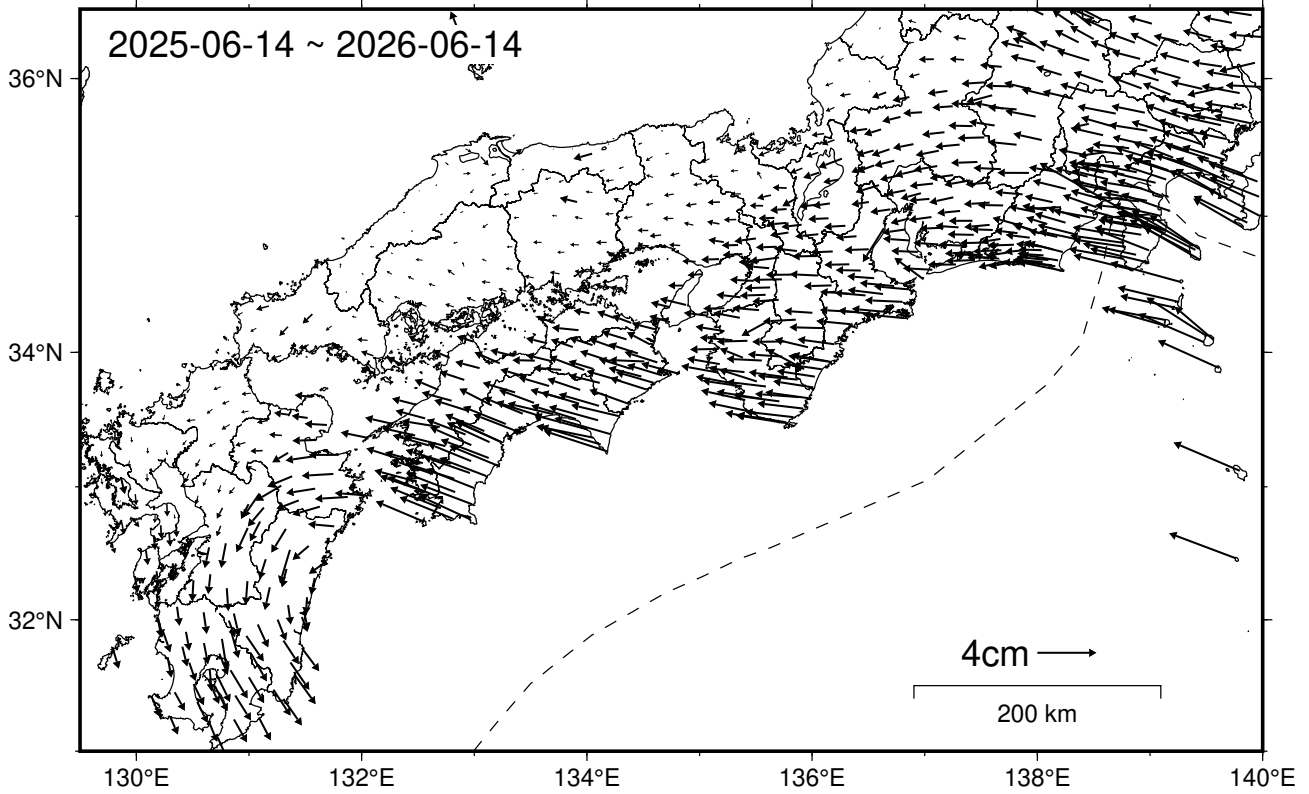
※ 1 2021年2月2日に電子基準点「安芸」のアンテナ更新及びレドーム交換を実施した。

※ 2 2024年11月25日に電子基準点「鵜殿」のアンテナ更新を実施した。

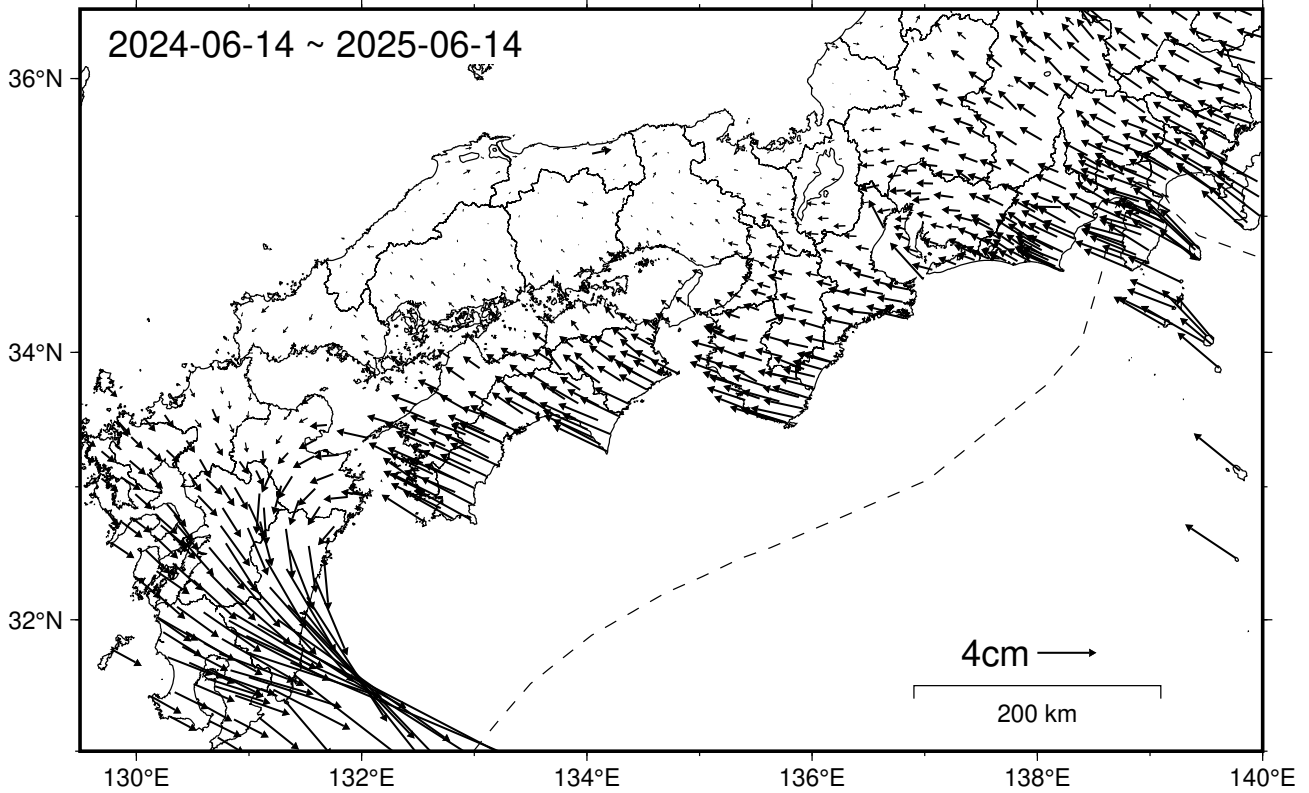
国土地理院

南海トラフ沿いの水平地殻変動【固定局：三隅】

【最近1年間】



【1年前の1年間】



・各日付 ± 6日の計13日間の変動量の中央値をとり、その差から1年間の変動量を表示している。

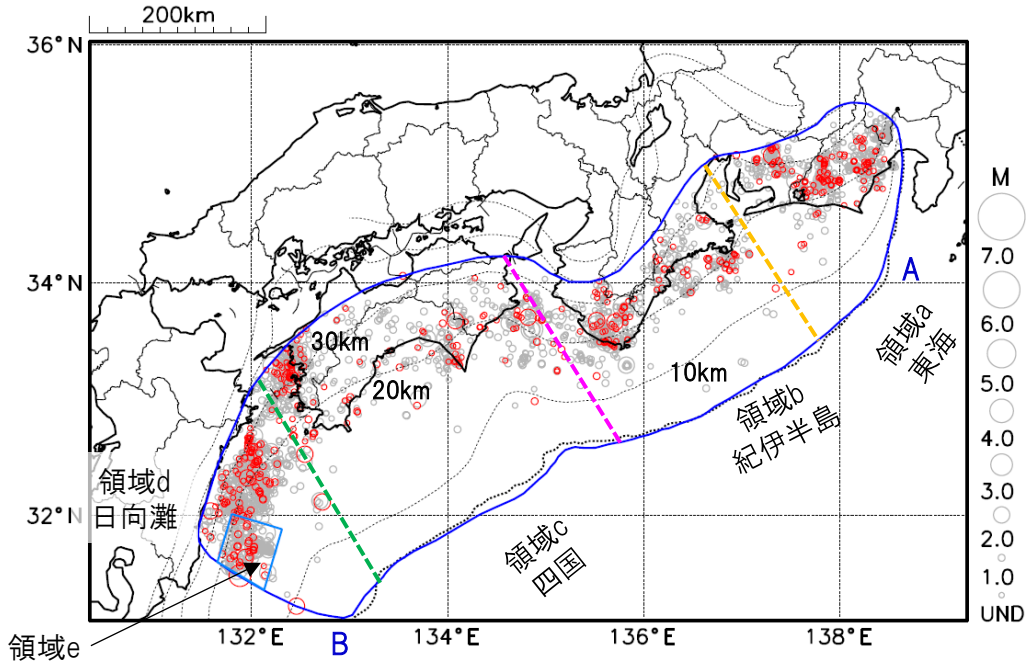
プレート境界とその周辺の地震活動

フィリピン海プレート上面の深さから±8km未満の地震を表示している。

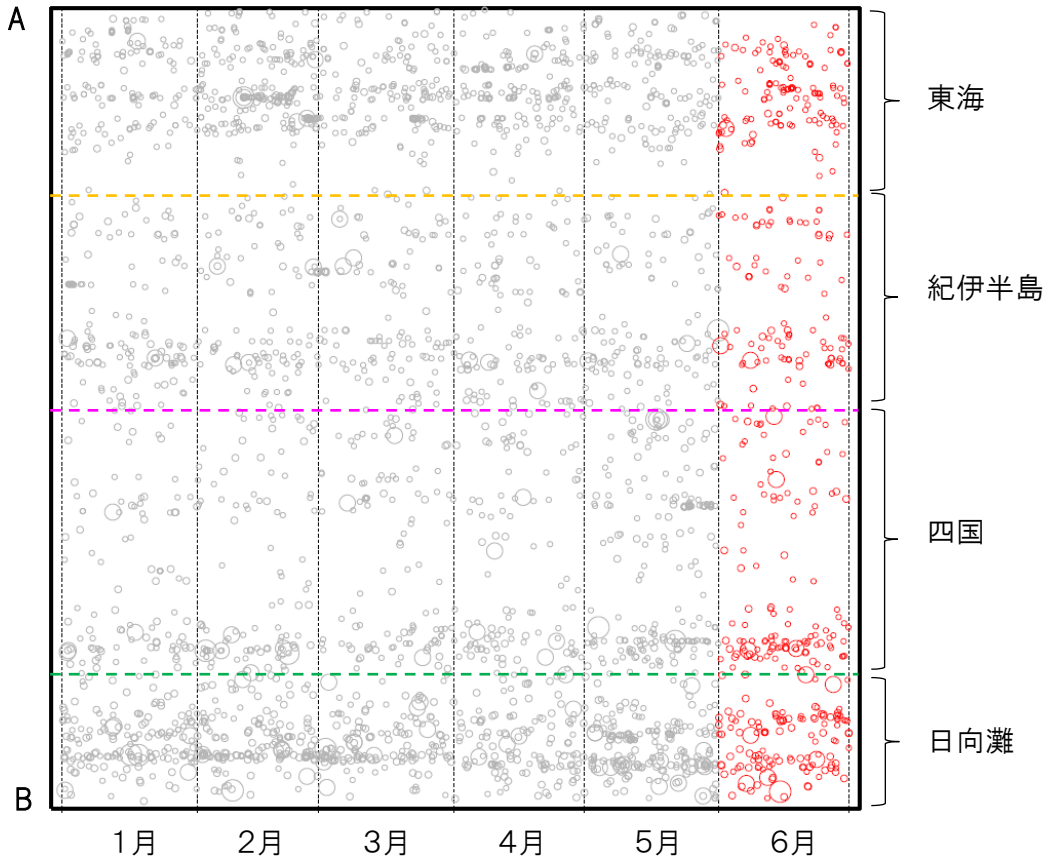
日向灘の領域e内のみ、深さ20km～35kmの地震を追加している。

震央分布図

(2026年1月1日～2026年6月30日、M全て、2026年6月の地震を赤く表示)



南海トラフ巨大地震の想定震源域内の時空間分布図(A-B投影)



・フィリピン海プレート上面の深さは、Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。

・今期間の地震のうち、M3.2以上の地震で想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震に吹き出しを付している。吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差(+は浅い、-は深い)を示す。

・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。

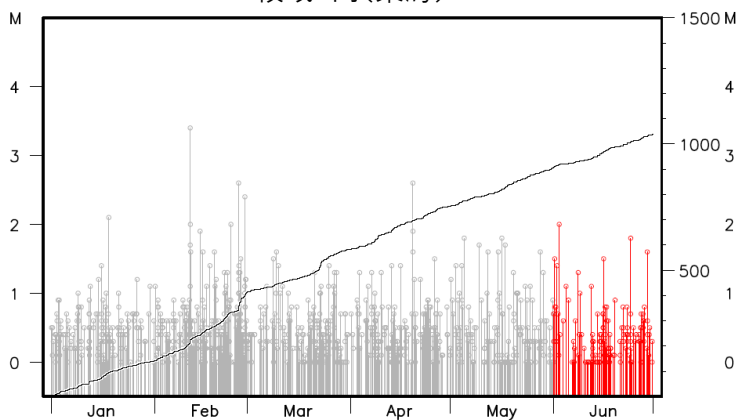
気象庁作成

プレート境界とその周辺の地震活動

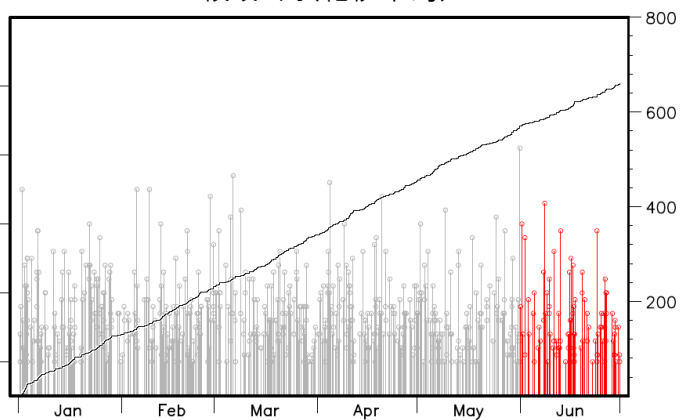
フィリピン海プレート上面の深さから±8km未満の地震を表示している。

震央分布図の各領域内のMT図・回数積算図
(2026年1月1日～2026年6月30日、M全て、2026年6月の地震を赤く表示)

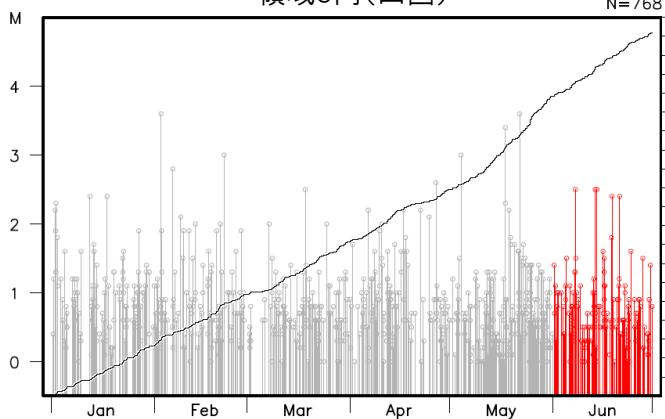
領域a内(東海)



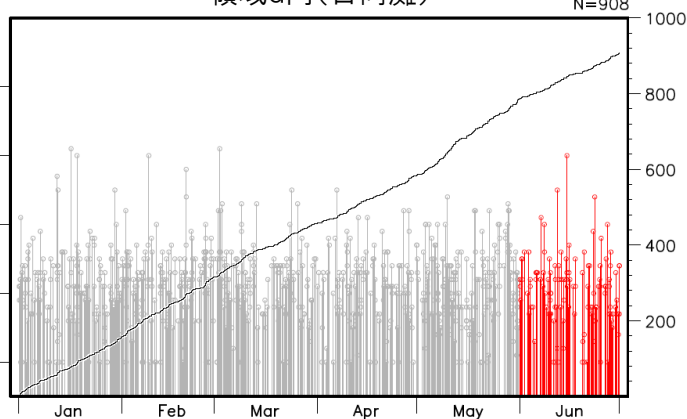
領域b内(紀伊半島)



領域c内(四国)



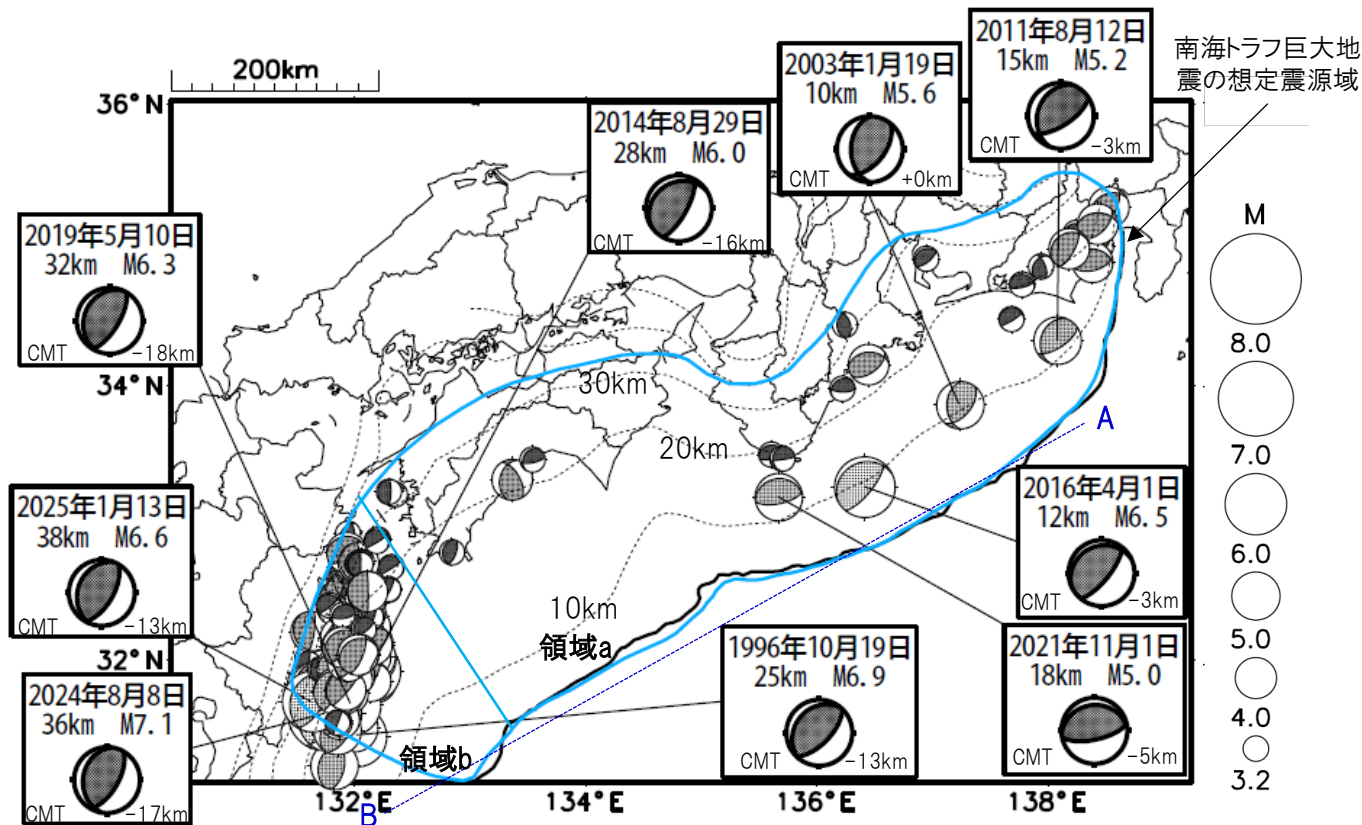
領域d内(日向灘)



※M全ての地震を表示していることから、検知能力未満の地震も表示しているため、回数積算図は参考として表記している。

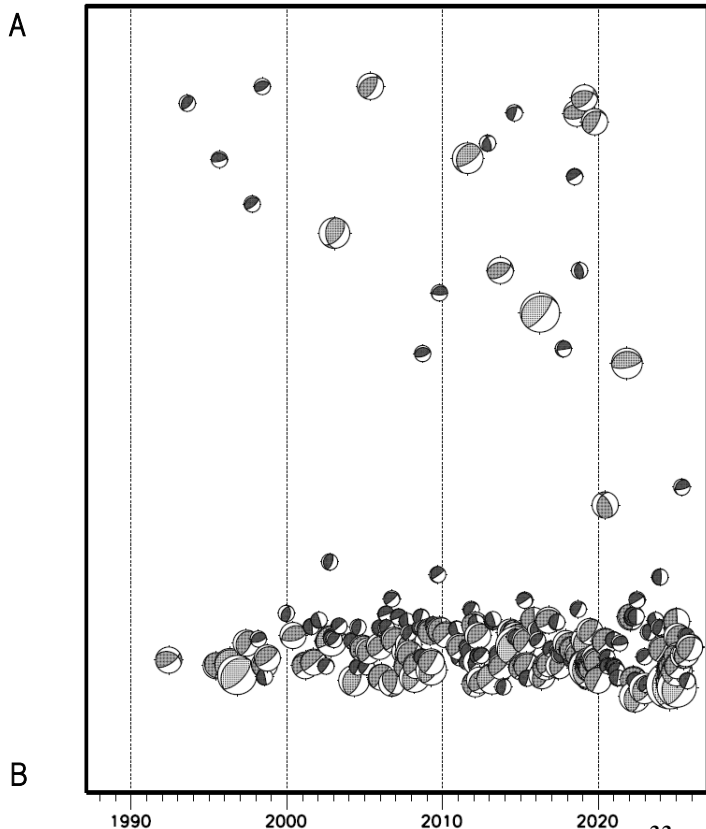
想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震

震央分布図(1987年9月1日～2026年6月30日、M \geq 3.2、2026年6月の地震を赤く表示)



- ・フィリピン海プレート上面の深さは、Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。
- ・今期間に発生した地震(赤)、日向灘のM6.0以上、その他の地域のM5.0以上の地震に吹き出しを付けている。
- ・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。
- ・吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差を示す。+は浅い、-は深いことを示す。
- ・吹き出しに「CMT」と表記した地震は、発震機構解と深さはCMT解による。Mは気象庁マグニチュードを表記している。
- ・発震機構解の解析基準は、解析当時の観測網等に応じて変遷しているため一定ではない。

震央分布図内の時空間分布図



プレート境界型の地震と類似の型の発震機構解を持つ地震は以下の条件で抽出した。

【抽出条件】

- ・M3.2以上の地震
- ・領域a内(南海トラフの想定最大規模の想定震源域内)で発生した地震
- ・発震機構解が以下の条件を全て満たしたものを抽出した。
 - P軸の傾斜角が45度以下
 - P軸の方位角が65度以上180度以下(※)
 - T軸の傾斜角が45度以上
 - N軸の傾斜角が30度以下
- ※以外の条件は、東海地震と類似の型を抽出する条件と同様
- ・発震機構解は、CMT解と初動解の両方で検索をした。
- ・同一の地震で、CMT解と初動解の両方がある場合はCMT解を選択している。
- ・東海地方から四国地方(領域a)は、フィリピン海プレート上面の深さから±10km未満の地震のみ抽出した。日向灘(領域b)は、+10km～20km未満の震源を抽出した。CMT解はセントロイドの深さを使用した。

気象庁作成

南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺の地震活動指数

2026年6月30日

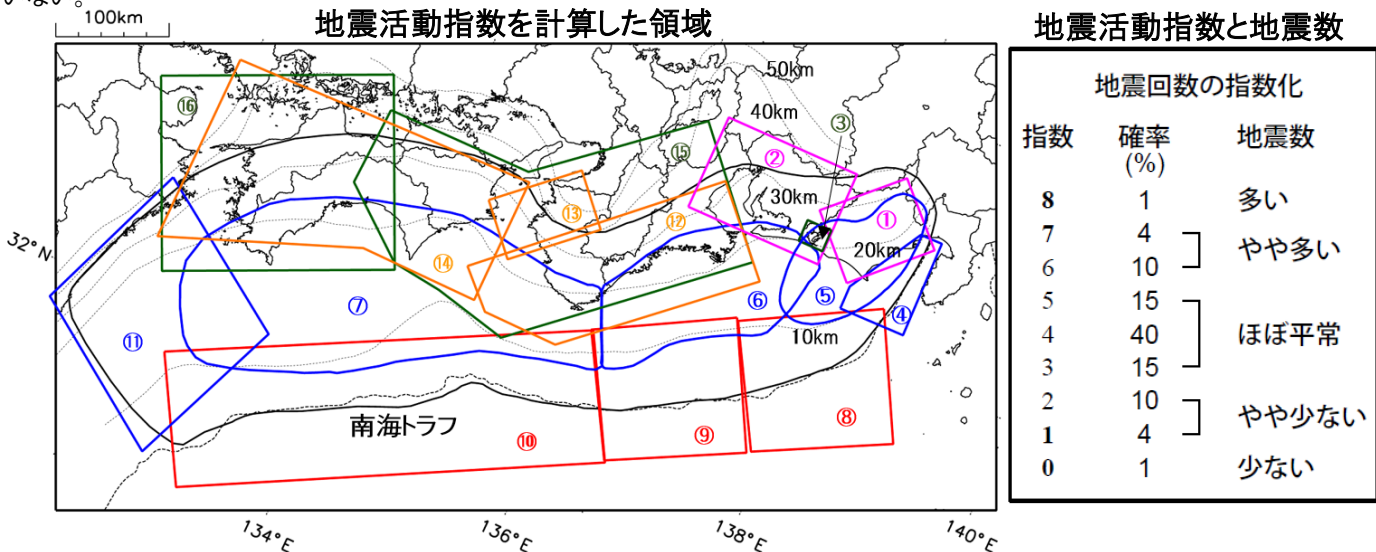
領域	①静岡県 中西部		②愛知県		③浜名湖 周辺	④駿河 湾	⑤東海	⑥東南 海	⑦南海	
	地	プ	地	プ	プ	全	全	全	全	
地震活動指数	3	2	7	4	4	3	3	4	4	
平均回数	16.4	18.0	27.0	13.8	13.1	13.1	17.8	19.6	21.6	
MLきい値	1.1		1.1		1.1	1.4	1.5	2.0	2.0	
クラスタ 除去	距離	3km		3km		3km	10km	10km	10km	10km
	日数	7日		7日		7日	10日	10日	10日	10日
対象期間	60日	90日	60日	30日	360日	180日	90日	360日	90日	
深さ	0~ 30km	0~ 60km	0~ 30km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 100km	0~ 100km	

領域	南海トラフ沿い		⑪日向 灘	⑫紀伊 半島	⑬和歌 山	⑭四国	⑮紀伊半 島	⑯四国	
	⑧東側	⑩西側							
	全	全	全	地	地	地	プ	プ	
地震活動指数	6	4	7	2	1	6	4	3	
平均回数	13.3	14.4	21.5	22.5	40.9	31.4	27.8	28.6	
MLきい値	2.5	2.5	2.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	
クラスタ 除去	距離	10km	10km	10km	3km	3km	3km	3km	3km
	日数	10日	10日	10日	7日	7日	7日	7日	7日
対象期間	720日	360日	60日	120日	60日	90日	30日	30日	
深さ	0~ 100km	0~ 100km	0~ 100km	0~ 20km	0~ 20km	0~ 20km	20~ 100km	20~ 100km	

* 基準期間は、全領域1997年10月1日～2026年6月30日

* 領域欄の「地」は地殻内、「プ」はフィリピン海プレート内で発生した地震であることを示す。ただし、震源の深さから便宜的に分類しただけであり、厳密に分離できていない場合もある。「全」は浅い地震から深い地震まで全ての深さの地震を含む。

* ⑨の領域(三重県南東沖)は、2004年9月5日以降の地震活動の影響で、地震活動指数を正確に計算できないため、掲載していない。



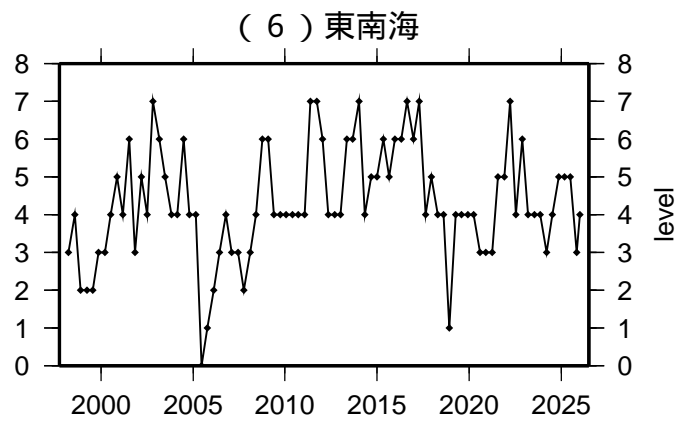
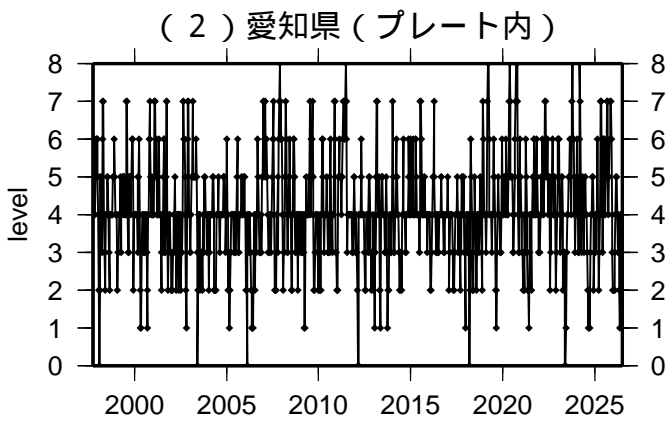
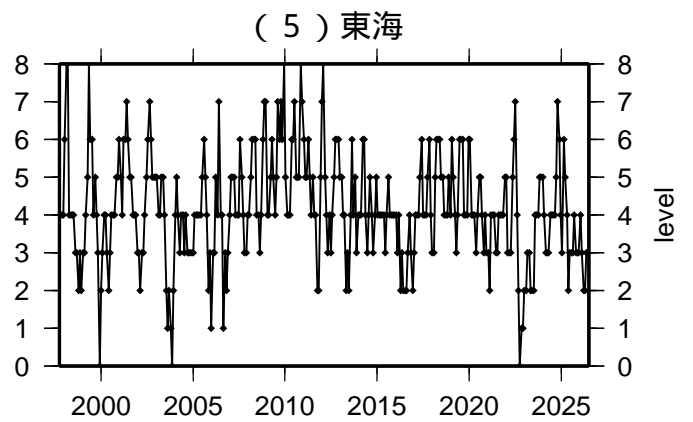
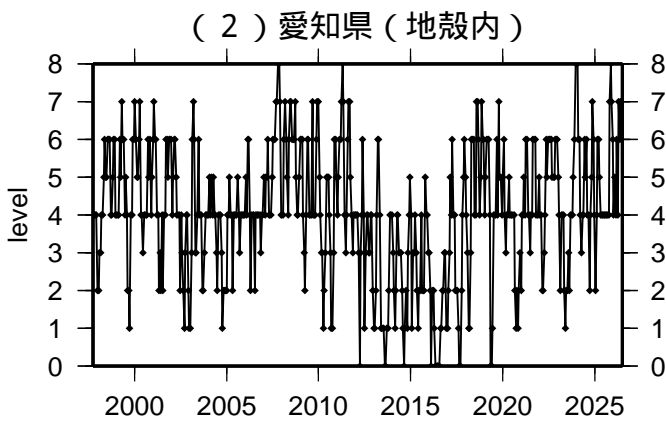
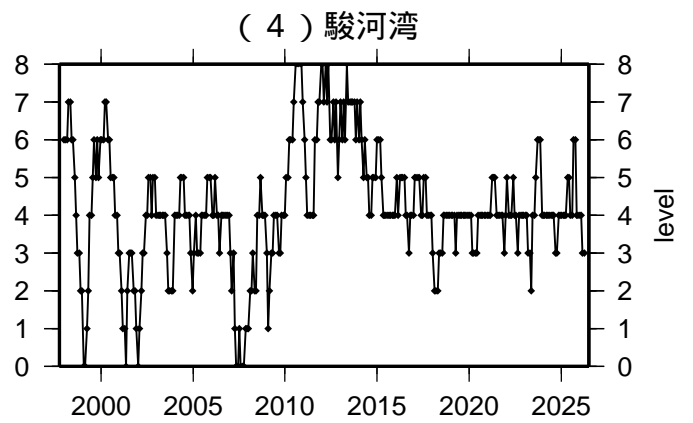
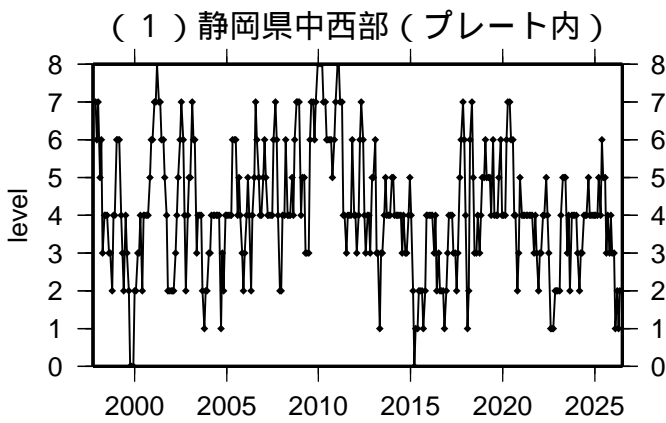
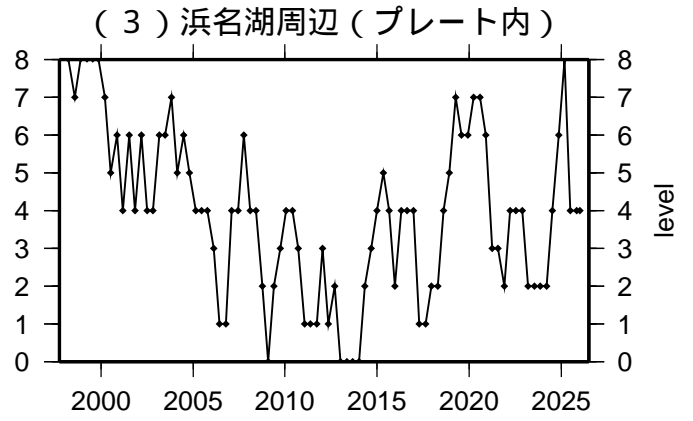
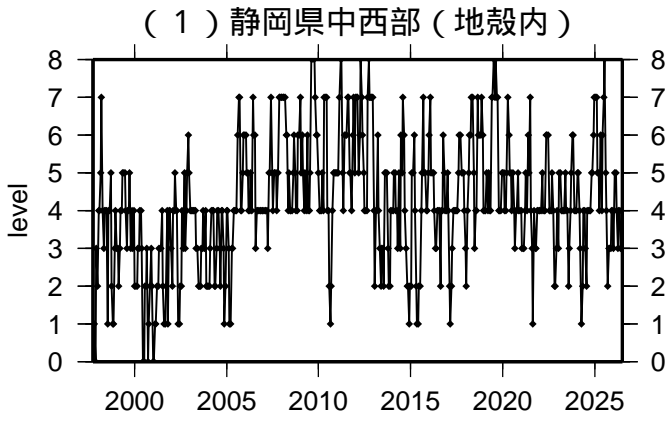
* 黒色実線は、南海トラフ巨大地震の想定震源域を示す。

* Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)によるプレート境界の等深線を破線以示す。

気象庁作成

地震活動指数一覧

2026年06月30日



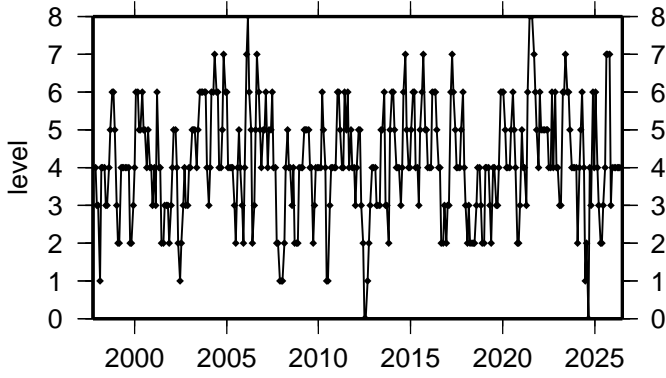
活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←		平常	→		多		

気象庁作成

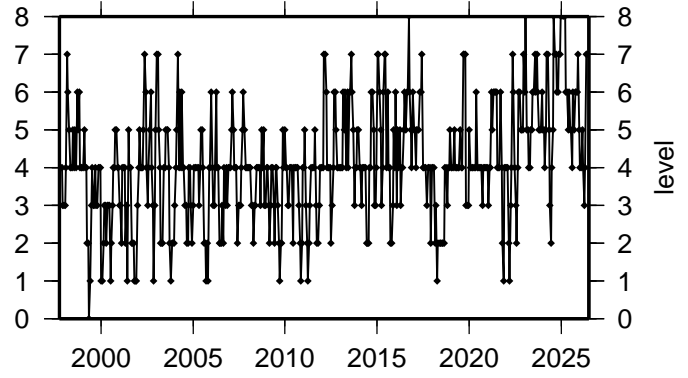
地震活動指数一覽

2026年06月30日

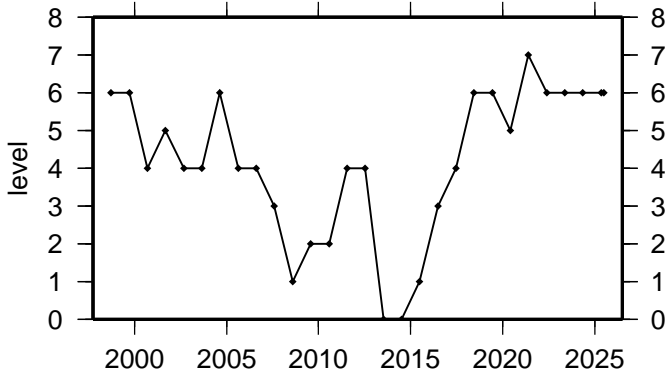
(7) 南海



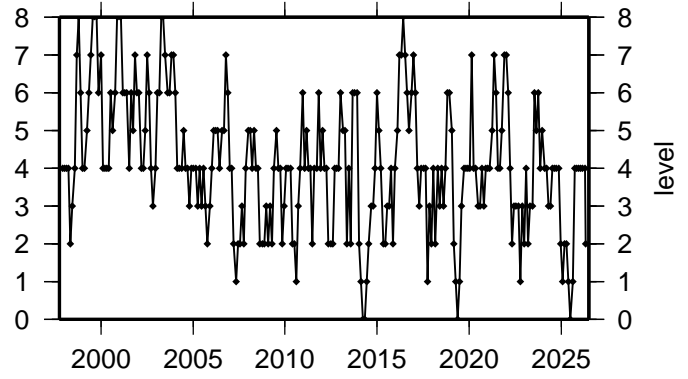
(11) 日向灘



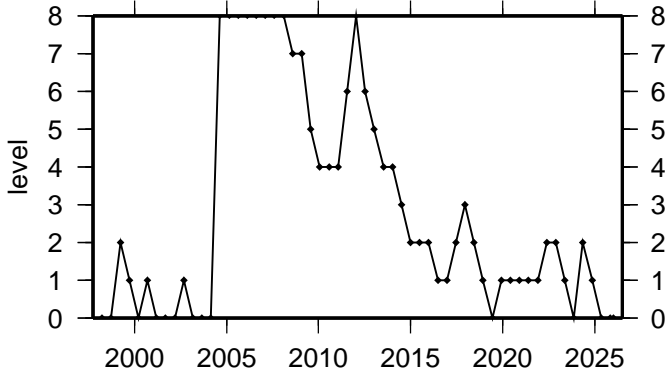
(8) 南海トラフ沿い(東側)



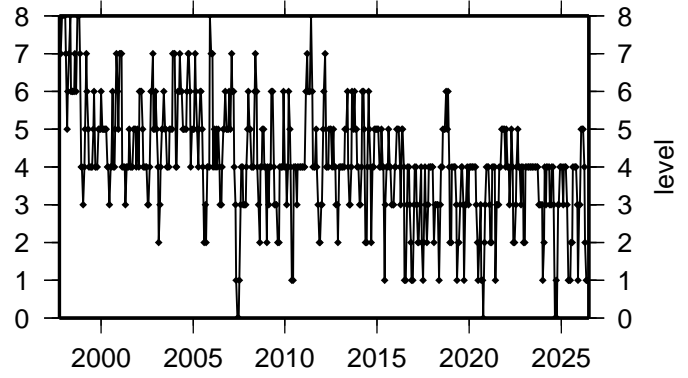
(12) 紀伊半島(地殻内)



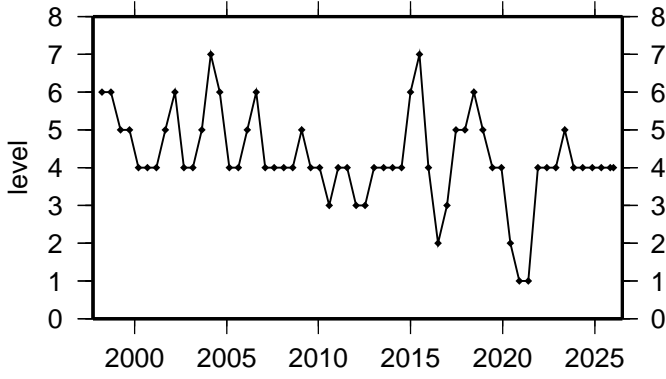
(9) 南海トラフ沿い(三重県沖)



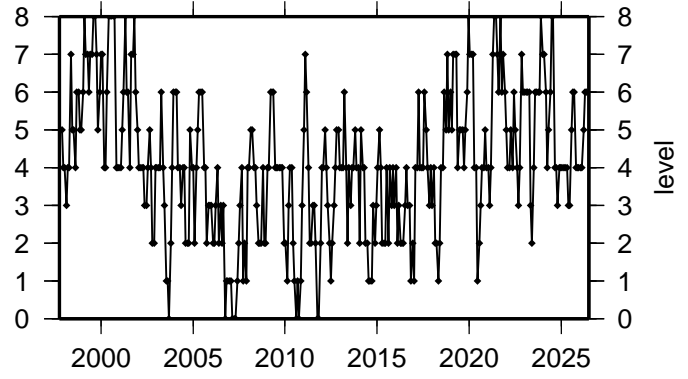
(13) 和歌山(地殻内)



(10) 南海トラフ沿い(西側)



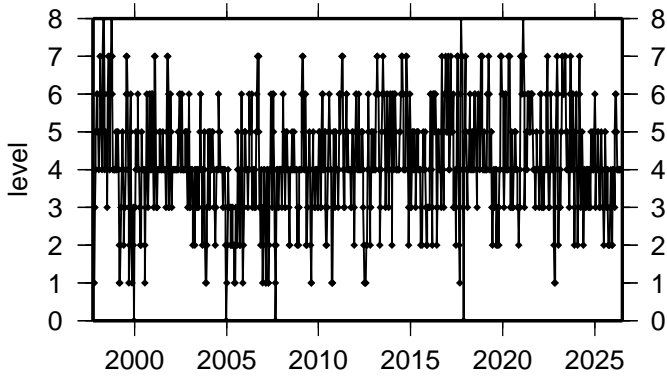
(14) 四国(地殻内)



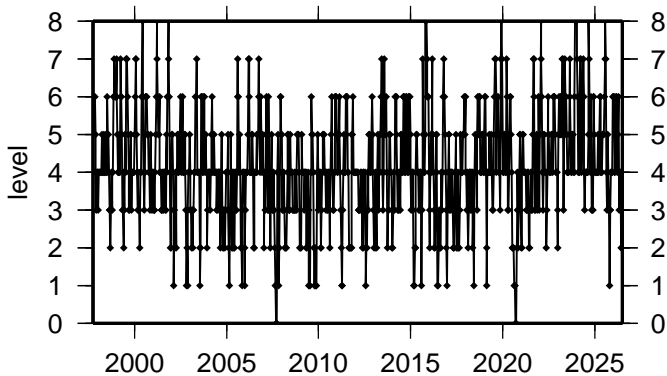
活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率(%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←	←	←	←	←	←	←	多

気象庁作成

(1 5) 紀伊半島 (プレート内)



(1 6) 四国 (プレート内)



活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	← 平常		多					

南海トラフ周辺の各種観測等について (リンク集)

- GNSS観測 (国土地理院: 日本列島の地殻変動)
<https://www.gsi.go.jp/kanshi/index.html>
- GNSS-Aによる海底地殻変動観測 (海上保安庁: 海底の動きを測る ~海底地殻変動観測~)
<https://www1.kaiho.mlit.go.jp/chikaku/kaitei/sgs/index.html>
- 高感度地震観測網 (防災科研: 高感度地震観測網)
<https://www.hinet.bosai.go.jp/>
- 孔内・海底ケーブルによる海底地殻変動観測 (海洋研究開発機構: 地震火山研究部門)
<https://www.jamstec.go.jp/rimg/j/>
- ひずみ観測 (産業技術総合研究所: 地震に関連する地下水観測データベース)
<https://gbank.gsj.jp/wellweb/GSJ/index.shtml>
- 南海トラフ地震全般 (気象庁: 南海トラフ地震について)
<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/jishin/nteq/index.html>